原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第７集

興（こう）触（ふれ）遺跡

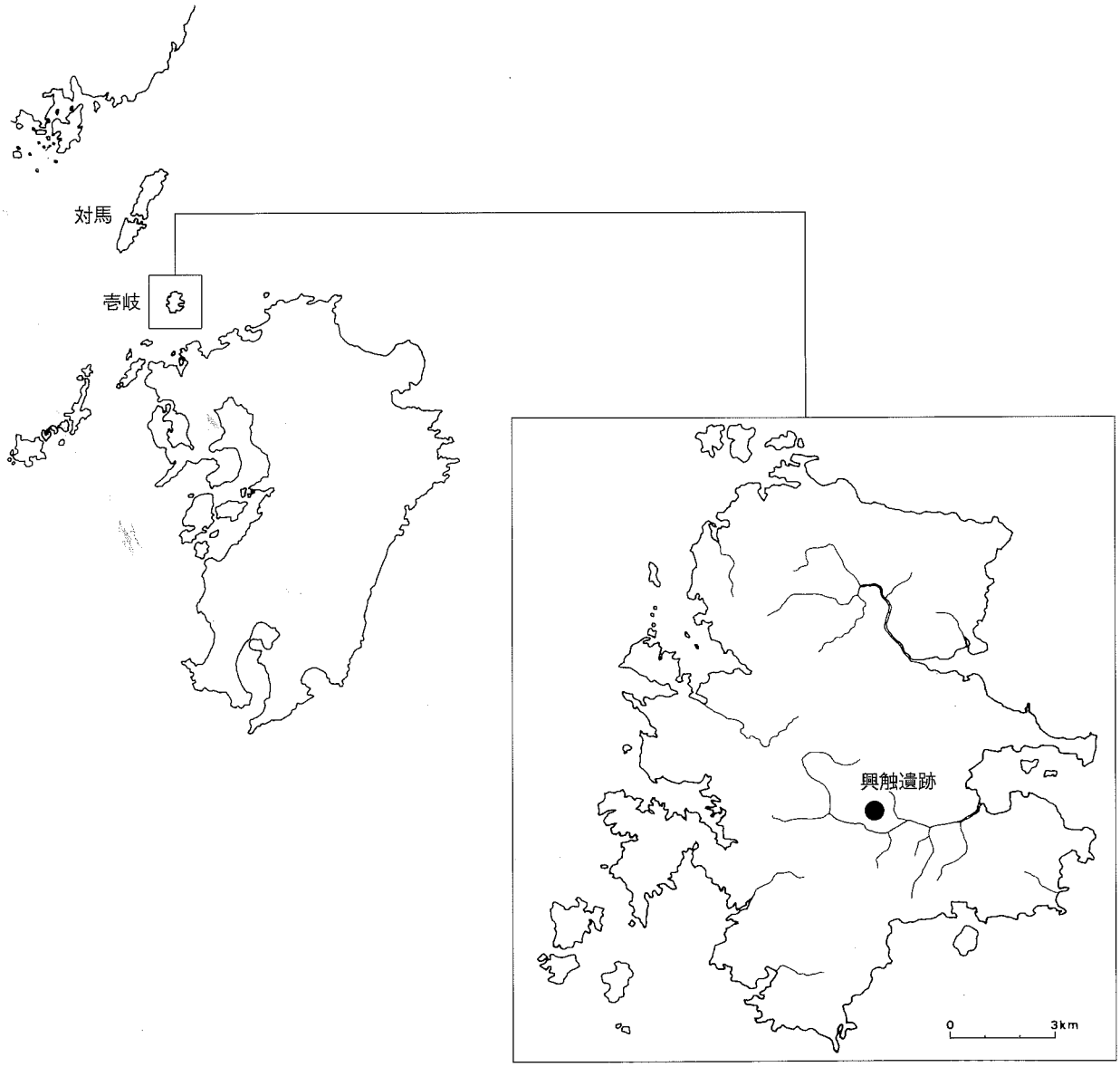
幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）
に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ

1998

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第７集

興触遺跡



Ⅲ区　SD 2 埋納白磁・土師皿

Ⅱ区　SK 1 ・SK 2 検出状況

II区　SK 1 検出状況

II区　SK 2 検出状況

発刊にあたって

本書は，幡鉾川流域整備計画に係る県営圃場整備工事に先立って実施された，興触遺跡の発掘調査報告書です。興触遺跡は，壱岐島最大の平野である深江田原の北西に位置し，地名の呼称が国府（こう）に通じることから，歴史地理学的な見地から，律令時代の壱岐国府の有力な推定地とされています。

今回の発掘調査では，律令時代から中世にかけての遺構・遺物が確認され，この地に生活や活動が営まれていたことが明らかになりました。遺構では，溝や土壙，柱穴が確認されましたが，とくに　区の溝では，溝を埋めた際に行ったと考えられる祭祀の跡が確認され，中国産の白磁碗が完形で出土しました。また，遺物の中には国産の緑釉陶器のほか，中国や朝鮮半島のものが多くみられ，幅広い活動が想像されます。今回の調査では，国府に直接結びつく資料は確認されませんでしたが，古代から中世にかけて，この地に何らかの拠点または有力者の存在が想定されます。

律令時代の壱岐については，比較的多くの文献資料に恵まれていますが，考古学的には，その様相はほとんどわかっていませんでした。今回の調査を通じて，古代から中世の壱岐の歴史の一端が明らかになれば，すでに解明が進んでいる弥生時代の様相と合わせより幅広く理解が進むものと考えられます。本書がその一助となることを願いつつ，刊行のあいさつといたします。

平成10年３月31日

長崎県教育委員会教育長　　中　川　　忠

例　　言

1．本書は，長崎県壱岐郡芦辺町湯岳興触に所在する興触（こうふれ）遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は，範囲確認調査を平成4年度と平成7年度に実施し，その結果を受けて本調査を平成9年度に実施したものである。

3．範囲確認調査は，芦辺町教育委員会が主体となり，長崎県教育委員会が協力した。

4．本調査は，長崎県教育委員会と芦辺町教育委員会が主体となった。原の辻遺跡調査事務所と芦辺町教育委員会がそれぞれ調査を担当した。

5．本書は，範囲確認調査と本調査について収録している。

6．本書に収録した遺物の実測，遺構・遺物の製図は，原の辻遺跡調査事務所がおこなった。

7．本書の写真は，川口洋平，松永泰彦が撮影した。

8．本書の執筆はⅢ－2，3－(2)，(3)を松永泰彦が，それ以外を川口洋平が担当した。

9．本書の編集は川口洋平による。

本 文 目 次

Ⅰ．遺跡の立地と歴史的環境……1
　1．遺跡の立地……1
　2．歴史的環境……1

Ⅱ．調査経緯……3

Ⅲ．調　　査……4
　1．範囲確認調査（平成4年度）……4
　2．範囲確認調査（平成7年度）……6
　3．本 調 査（平成9年度）……11

Ⅳ．ま と め……30

挿 図 目 次

第1図　遺跡周辺図（1／10,000）……1
第2図　文久年間に描かれた興神社周辺……3
第3図　ＴＰ配置図（1／1,000）……4
第4図　土層図（1／60）……5
第5図　出土遺物（1／3）……5
第6図　ＴＰ配置図（1／2,000）……6
第7図　土層平面図（1／40）……8
第8図　出土遺物（1／2・1／3）……9
第9図　調査区域図（1／2,000）……12
第10図　Ⅱ区・遺構実測図（1／100）……13
第11図　Ⅰ・Ⅱ区土層図（1／40）……15
第12図　Ⅱ区遺構実測図（1／20）……16
第13図　Ⅰ・Ⅱ区出土の遺物（1／3）……18
第14図　Ⅱ区出土の遺物（1／3）……19
第15図　Ⅲ区・土層図（1／80）……21

第16図　Ⅲ区の遺構・遺物出土状況（１／40・１／10）……22
第17図　Ⅲ区出土の遺物①（１／３）……24
第18図　Ⅲ区出土の遺物②（１／３）……25
第19図　Ⅳ区土層・平面図（１／80）……27
第20図　Ⅳ・Ⅴ区の出土遺物（１／３）……28
第21図　出土銭貨幣の拓影……29

表　目　次

表１　グリッド別遺構・遺物集計……7
表２　Ⅰ・Ⅱ区出土遺物観察表……17
表３　Ⅲ区出土遺物観察表……23

図 版 目 次

図版１　遺跡遠景・Ⅱ区調査風景・Ⅱ区包含層検出状況……33
図版２　Ⅱ区遺構検出状況・ＳＤ１（南端）・ＳＤ（北端）……34
図版３　ＳＫ１検出状況・同・同遺物出土状況……35
図版４　ＳＫ２検出状況・同・同遺物出土状況……36
図版５　ＳＤ１土層図（Ｄ区）・同（Ｃ区）・Ｄ区西側落ち込み……37
図版６　Ｅ区北側土層・Ｇ区北側土層・Ⅲ区調査風景……38
図版７　Ｒ区東側土層図・Ｊ区南側土層図・ＳＥ１……39
図版８　ＳＤ２検出状況・ＳＤ２完掘状況・埋納白磁……40
図版９　平成４年度範囲確認調査出土遺物・ＳＫ１出土遺物・ＳＫ２出土遺物……41
図版10　ＳＤ２出土遺物……42
図版11　ｄ区北壁土層・ｅ区北壁土層・ｉ区遺物出土状況……43
図版12　平成７年度範囲確認調査柱穴検出状況・青磁碗出土状況・出土遺物……44

Ⅰ．遺跡の立地と歴史的環境

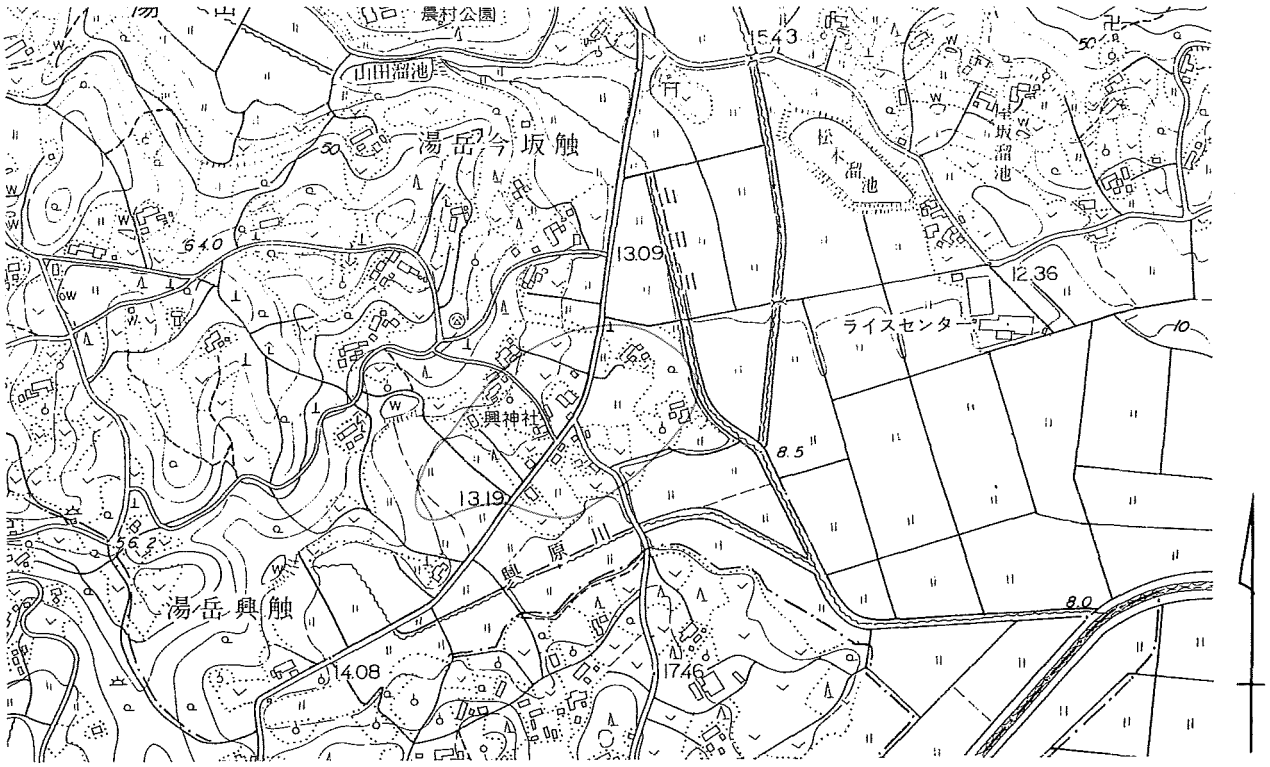
1．遺跡の立地

壱岐島は，九州と朝鮮半島の間の玄海灘に浮かぶ東西約15km，南北約17km，面積約139km²の島である。全体適に起伏が少なく，島の最高峰である岳の辻でも213mにすぎず，地形の峻険な対馬と対照的である。島の基盤は第三紀の堆積岩で，その上を玄武岩が覆っている。

島の東南部には，島内最大の平野である深江田原があり，長崎県ではまれな肥沃な穀倉地帯としてしられている。興触遺跡はこの平野の北西部の外縁に位置し，北側の山から平野に突き出た舌状台地とその周辺にひろがっている。舌状台地には，数条の谷が入り込んでおり複雑な地形となっている。遺跡の標高は8～18mで，現状は水田，畑などとなっている。

2．歴史的環境

壱岐島はその地理的な条件から，大陸への中継点として特異な発展をとげた島であるといえるだろう。その名は三世紀の中国の歴史書いわゆる『魏志倭人伝』の中に「一支国」としてみえ，弥生時代のクニとして成立していたことがわかる。近年，本遺跡と同じ深江田原にある原の辻遺跡が，島内最大の環濠集落であることが確認され，一支国の中心集落であると評価されるに至っている。



第1図　遺跡周辺図（1／10,000）

古墳時代から古代にかけても，大陸との関係から壱岐島は中央政権から重要視され，とくに後期古墳には，中央とのつながりを推測させる規模・内容を誇るものが多い。律令時代には，国の扱いを受け国府や島分寺も置かれた。壱岐島は，古代末から中世前期にかけて，たびたび外敵の襲来を受け，混乱したものと考えられる。中世後期には，南北朝の動乱をはじめとする国内情勢の変化に応じて，様々な勢力が島内に入り，割拠していたと考えられる。中世の壱岐に関しては，一級資料といえる文献がなく，その実情については不明な点が多い。

II．調査経緯

律令時代，対馬とならび壱岐にも国府が置かれた。国府の置かれた場所については現在まで特定されていないが，歴史地理学的にはいくつかの説が唱えられている。その根拠となるものに平安時代に成立した『延喜式』(1)と『和名抄』(2)がある。『延喜式』は，壱岐は下国で壱岐，石田の二郡から成るとし，優通という駅家を記している。また，『和名抄』は，この二郡の郷を記し国府は石田郡にあるとしている。本遺跡周辺は，地名が国府（こう）に通じることや，印鑰社とされる興神社があることなどから国府の推定地とされている(3)。江戸時代末の文久年間に成った『壱岐名勝図誌』(4)によれば，地名は「川原」の訛ったものとの見方をとり，国府との関連に否定的である。付近が古代に石田郡であったのか，壱岐郡であったのかについても意見が分かれるところである。本遺跡は芦辺町にあるが，隣接した石田町側には興原遺跡があり，近世においては郡境であった。いずれにせよ，考古学的な実証がなされていた訳ではなく，有力な国府推定地であるとの域を出なかった。

平成４年，幡鉾川流域の県営圃場整備の計画に先立って，芦辺町教育委員会により工事にかかる遺跡の範囲確認調査が国庫補助事業として行われることとなった。興触遺跡もその対象となり，調査によって中世の遺物包含層が確認されたため，平成７年度に芦辺町教育委員会は，より広範囲な範囲確認調査を行った。この結果を受けて，平成９年度に工事にかかる区域について本調査を実施することとなった。本調査は，長崎県教育委員会と芦辺町教育委員会が主体となって行うこととなり，原の辻遺跡調査事務所と芦辺町教育委員会がそれぞれ調査を担当した。調査は，長崎県教育委員会が平成９年11月12日から平成10年３月６日まで867.8m²を，芦辺町教育委員会が平成10年２月20日から平成10年３月31日まで311.0m²を担当した。

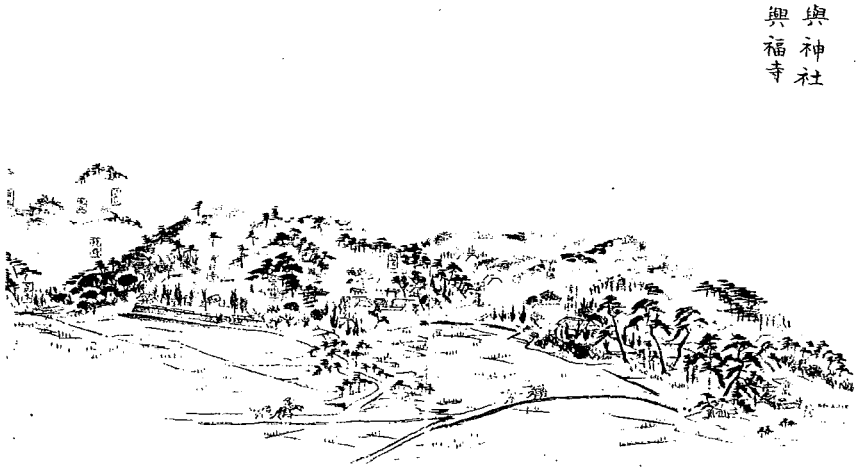
註

(1) 延長五年（927）成立

(2) 承平五年（935）成立

(3) 山口麻太郎，木下良，日野尚史など。

(4) 後藤正恒・古野尚盛による。文久元年（1861）



第２図　文久年間に描かれた興神社周辺（『壱岐名勝図誌』より）

Ⅲ．調　　査

１．範囲確認調査（平成４年度）

(1)　調査概要

①調査関係者　調査関係者は以下のとおりである。

芦辺町教育委員会		長崎県教育庁文化課	
教育長	野元　茂生	課長補佐	田川　　肇
教育次長	長嶋　邦昭	主任文化財保護主事	副島　和明（調査担当）
社会教育主事	浦川　　巧	文化財保護主事	寺田　正剛（調査担当）
文化財指導員	吉田　貞光		

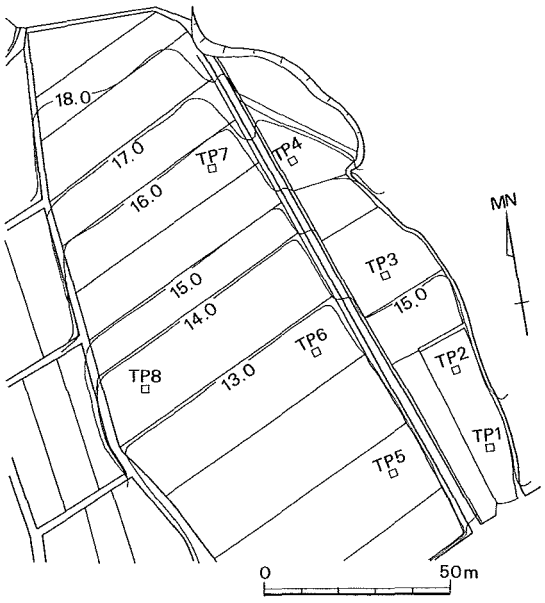
②調査方法（第３図）　調査は，２ｍ×２ｍの試掘壙を任意に８箇所設定して行った。合計した調査面積は32m²である。掘り下げは人力で行い，遺物包含層については精査を行った。調査期日は，平成４年11月16日から平成４年11月21日である。

③土層（第４図）　層位は，丘陵部と低地部でかなり異なるが，基本的には以下に大別できる。第１層は，茶褐色または灰褐色の水田土である。第２層は，暗褐灰色の硬い粘質土で水田の床土である。第３層は，黒灰色の粘質土で古代～中世の遺物包含層である。第４層は，明青灰色粘質土で緑化した土粒や砂粒を含む。第５層は，赤紫色の風化礫層である。

④遺構　今回の調査では，遺構は確認されなかった。

⑤遺物（第５図）　今回の調査では，ＴＰ３，４，５，６，８において遺物包含層が確認された。出土した遺物は，古墳時代から中世に及ぶが，その主体は中世であると考えられる。７点を図化した。

１は森田・横田分類[1]の白磁碗Ⅱ類の口縁部で，ＴＰ３の第２層から出土した。胎土は灰色で，貫入の多い乳白色釉がかかる。器表は風化で汚れ，小さな玉縁状の口縁をもつ。２は森田・横田分類の白磁碗Ⅳ類の口縁部でＴＰ８の第２層から出土した。胎土は白灰色で，ガラス質の白灰色透明釉がかかる。大きな玉縁状口縁である。３も同分類の白磁碗Ⅳ類の口縁部で，ＴＰ６の第２層から出土した。胎土は白灰色で，ガラス質の白色透明釉がかかる。体下部外面は露胎となっている。断面がやや細長い玉縁状の口縁である。４は同分類の白磁碗Ⅳ類の底部で，ＴＰ３の第２層から



第３図　ＴＰ配置図（１／1,000）

出土した。胎土はやや黄色味がかった白灰色で，白灰色の透明釉がかかる。体下部から高台内にかけては露胎となっている。見込みには沈線が入る。５は，須恵器の杯蓋の端部でＴＰ８の第１層から出土した。胎土は精良で青灰色を呈し，焼成は良好である。身受けのかえりは小さい。６は土師器の皿の底部でＴＰ８の第１層から出土した。胎土は精良でやや黄色味がかった白色を呈し，焼成は良好である。高台は断面角形で丁寧につくられる。古代のものか。７は備前系のすり鉢でＴＰ３の第２層から出土した。胎土は精良で暗赤褐色を呈し，焼成は良好で堅緻に焼締められている。荻野繁春[2]の分類によるⅪ期（16世紀後葉～17世紀前葉）に相当するものと考えられる。

(2) まとめ

今回の調査の結果をまとめると以下のようになる。

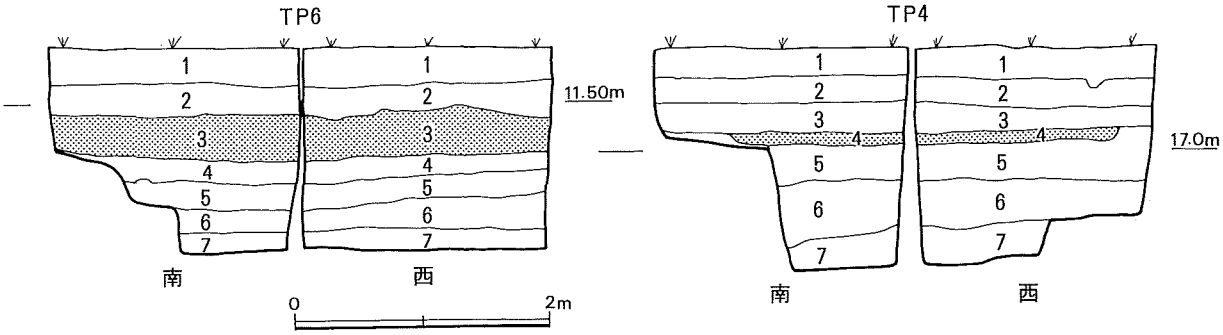
①ＴＰ３，４，５，６，８において，古墳時代から中世におよぶ遺物包含層が確認された。

②したがって，この区域においては工事着工前に遺跡の取り扱いについて協議の必要がある。

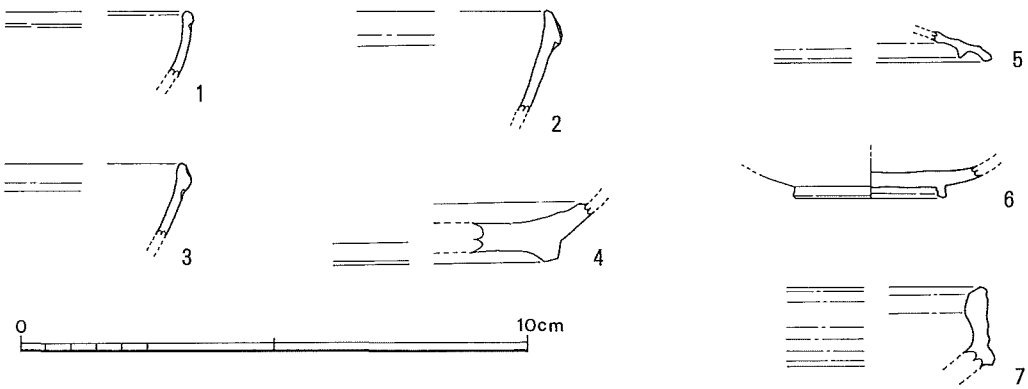
註

(1) 森田勉・横田賢次郎「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』1978

(2) 荻野繁春「財産目録に顔を出さない焼き物たち」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集1990



第４図　土層図（１／60）　※網点部分は遺物包含層



第５図　出土遺物（１／３）

2．範囲確認調査（平成７年度）

(1) 調査概要

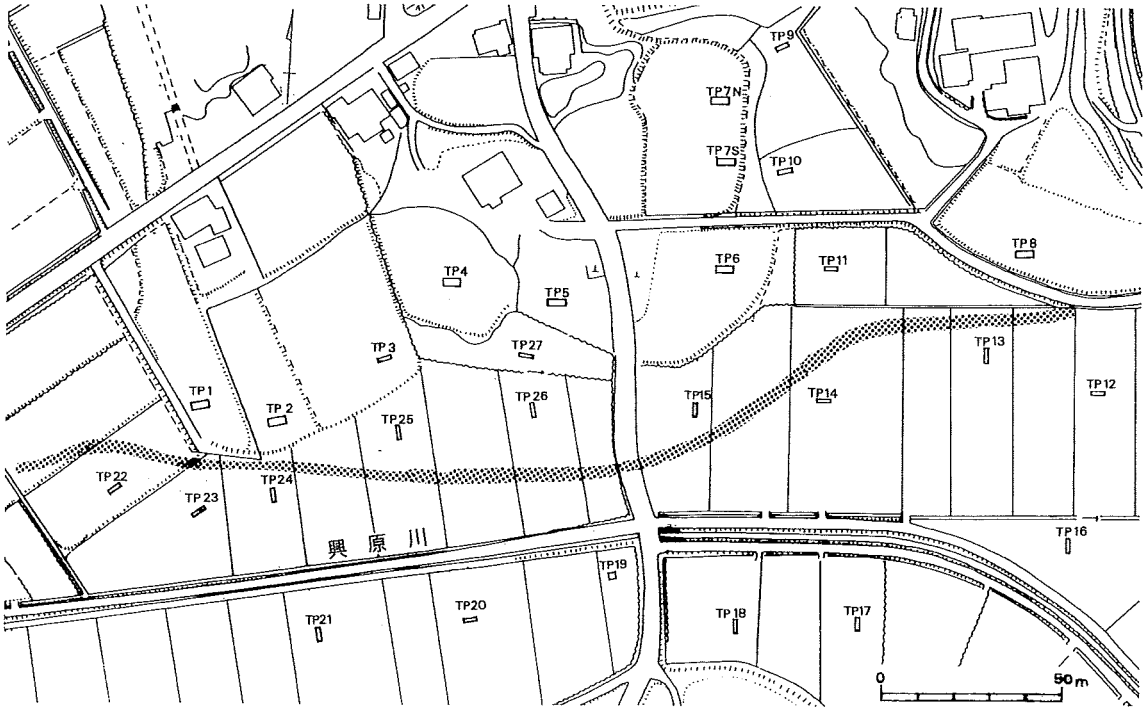
幡鉾川流域総合整備事業（平成４年度～平成13年度）に係る県営圃場整備事業に伴い，興触遺跡（先土器～古墳）周辺が工事区域に含まれた。芦辺町教育委員会は遺跡のありかたを知るため，平成７年度に国庫補助を受け埋蔵文化財範囲確認調査を実施した。

①調査関係者　調査関係者は以下のとおりである。

芦辺町教育委員会		長崎県教育庁	
教育長	今西　國善	原の辻遺跡調査事務所	
〃	末永　雅照(平成7年1月より)	文化課	
教育次長	辻本　　正	文化財保護主事	川口　洋平(調査担当)
社会教育主事補	山口　信幸		
文化財指導員	松永　泰彦(調査担当)		

②調査方法（第６図）調査は，作物作付けの関係で２期に別けて行い，前期は平成７年７月28日から同年９月20日までの期間で，興原川(幡鉾川支流)北側台地の畑地に２ｍ×５ｍのグリットを８箇所設定しＴＰ１，２，４，５，６，７，８と記符号した。ＴＰ-７については一枚の畑に２箇所のグリットを設定したため，便宜上北側のグリットをＴＰ-7N，南側のグリットをＴＰ-7Ｓとした。調査面積80㎡である。

後期は平成８年２月20日から同年３月８日まで，水稲の収穫が終わった水田に約５㎡のグリットを20箇所設定しＴＰ３，９～27と記符号した。



第６図　ＴＰ配置図（１／2,000）

レベルは遺跡の西側約40mの一般県道郷ノ浦芦辺線沿いにある地籍図根三角点(13.09m)から移設した。

③土層　層位は，丘陵部の畑地と低地部の水田では異なる。基本的に畑地では，第１層は明黄褐色である。第２層はにぶい黄橙色または黄褐色で，第３層は褐色または黄褐色で，第４層は暗褐色である。第３層と第４層が中世の遺物包含層である。水田部では，第１層は褐色（耕作土）で，第２層はにぶい黄褐色で，マンガン粒を含む水田床土である。第３層は褐灰粘質土で，第４層は暗褐色粘質土で，第５層は黒褐色粘質土で，炭化物を含む。第４層，第５層は古代から中世の遺物を含む包含層である。第６層は黄褐色粘土で，第７層は灰白色粘土層で，下層は火山岩堆積層である。

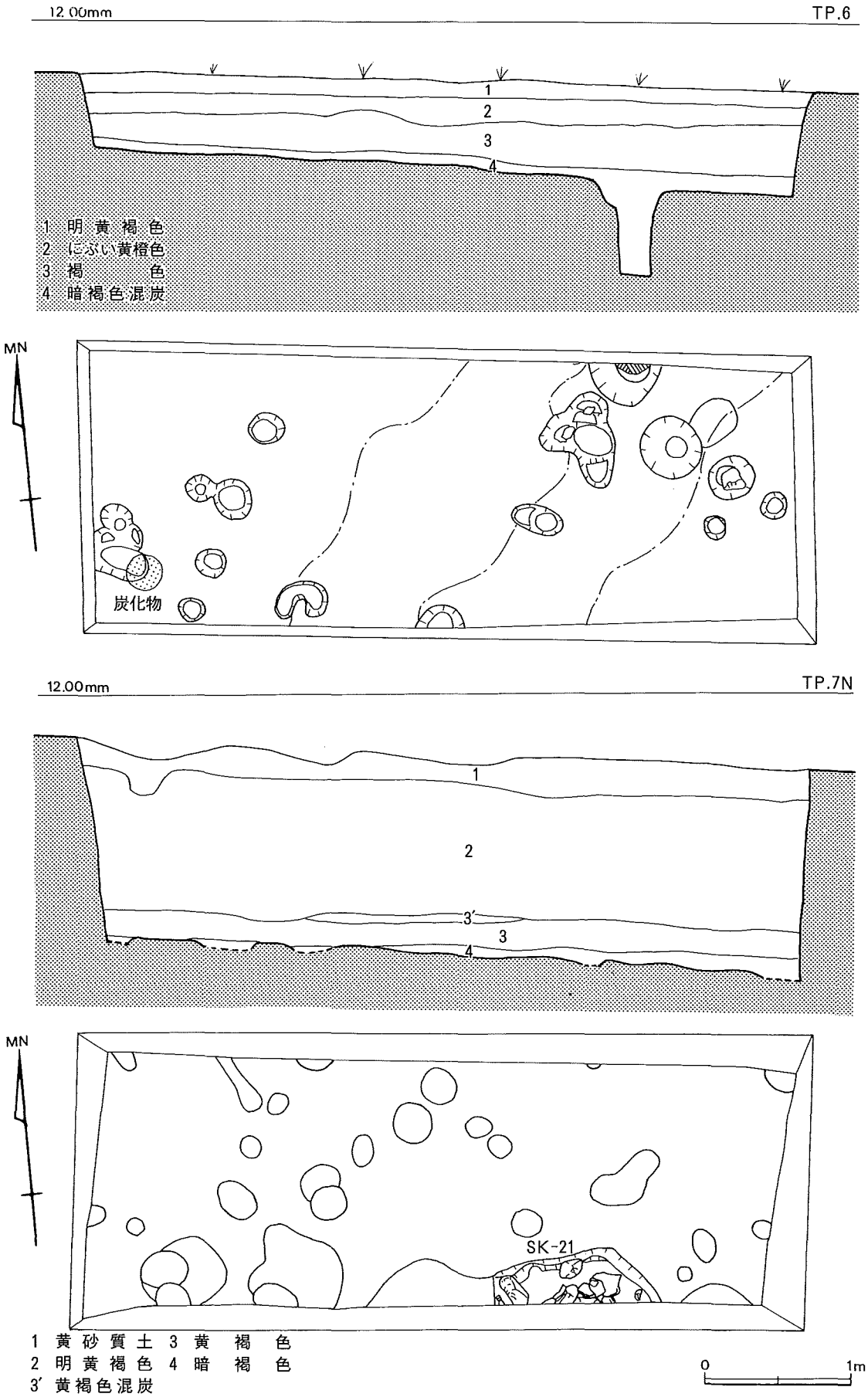
④遺構　遺構は，丘陵部分のＴＰ１，２，３，５，６，７，８の各グリットで柱穴88基，土壙４基を確認した。低地部分では包含層のみで遺構の検出はできなかった。次にグリット別の検出遺構，主な出土遺物一覧表を下段に示す。

⑤遺物（第８図）ＴＰ４，５，６，７，８，９，10，11，15，25，26で遺物包含層を確認した。出土した遺物は，旧石器から近世に及ぶが，出土した量から見ると遺跡中心は中世と考えられる。ここでは図化できるものから14点を載せた。８は越州窯系青磁の底部である。低い輪高台をもち，高台と体部の境は不明瞭である。見込みと高台外寄りに目跡を残す。胎土は明褐灰色で浅黄色の釉を全体に施す。９は緑釉陶器である。低めの有段の輪高台で灰色の胎土である。濃緑の釉を施す。ＴＰ７-３層から出土した。10は越州窯系青磁の底部と思われる。輪高台で畳み付けは内斜ぎみに釉をカキ取り，体部外面に押圧ぎみのヘラ縦線を有する。胎土は灰白色で釉は白濁色をなす。ＴＰ10-５層から出土しいた。

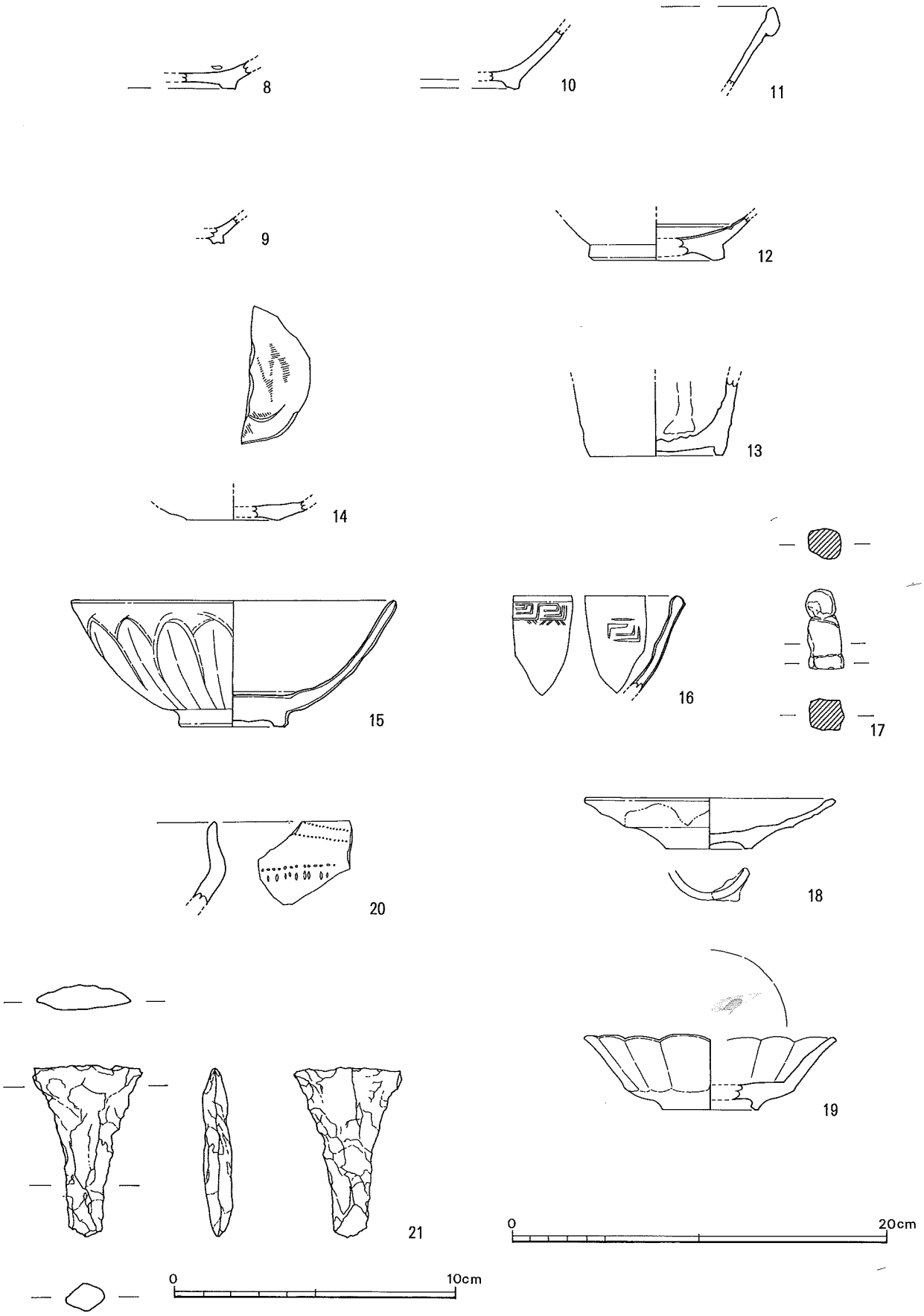
グリット	検出遺構	主な出土遺物
ＴＰ－１	柱穴３基	貿易陶磁器３ほか　18点
ＴＰ－２	柱穴２基	貿易陶磁器１ほか　10点
ＴＰ－３		貿易陶磁器５ほか　９点
ＴＰ－４	柱穴13基	貿易陶磁器97，プレ１，製塩土器ほか 446点
ＴＰ－５	柱穴10基	貿易陶磁器20，プレ１ほか　159点
ＴＰ－６	柱穴17基	貿易陶磁器71ほか　269点
ＴＰ－７	柱穴40基　土壙４基	貿易陶磁器186，緑釉陶器１ほか　688点
ＴＰ－８	柱穴３基	貿易陶磁器61，石鏃１，滑石製仏像１ほか 321点
ＴＰ－９		貿易陶磁器３，縄文土器１，プレ１ほか　33点
ＴＰ－10		貿易陶磁器19ほか　159点
ＴＰ－11		貿易陶磁器６ほか　35点
ＴＰ－12		貿易陶磁器１ほか　１点
ＴＰ－13		砥石ほか　４点
ＴＰ－14		須恵器ほか　２点
ＴＰ－15		貿易陶磁器８，プレ１ほか　６点
ＴＰ－16		
ＴＰ－17		緑釉陶器１点
ＴＰ－18		スクレーパーほか　３点
ＴＰ－19		須恵器ほか　３点
ＴＰ－20		貿易陶磁器１ほか　４点
ＴＰ－21		
ＴＰ－22		近世陶磁器４ほか　３点
ＴＰ－23		貿易陶磁器２ほか　６点
ＴＰ－24		貿易陶磁器１ほか　３点
ＴＰ－25		貿易陶磁器１，緑釉陶器１ほか　60点
ＴＰ－26		貿易陶磁器24，緑釉陶器２ほか　77点
ＴＰ－27		貿易陶磁器１，石鍋ほか　４点

第１表　グリット別遺構・遺物集計

11は森田・横田分類の白磁碗Ⅳ類の口縁部でＴＰ26-３層から出土した。灰白色で口縁部近くまで露胎である。12は白磁碗の底部である。見込みに段を有する。外面は高台内まで露胎である。13は伊万里徳利であろう。高台から開き気味で真直に立ち上がる体部である。14は同安窯系青磁皿の底部である。内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を有する。外底部は釉をカキ取り露胎としている。



第7図　土層平面図（1／40）



第8図　出土遺物（1／2・1／3）

15は龍泉窯系鎬蓮弁文青磁碗で，森田・横田分類の青磁碗Ⅰ－5．b類にあたる。ＴＰ７ＮのＳＫ－１から出土した。16は亀井氏による雷文帯青磁碗の口縁部である。ＴＰ26－５層から出土した。17は滑石製の仏像形石製品である。高さ4.25cmを計る。石鍋の転用品であろうか。18は唐津系皿である。削り出し高台に砂目が残る。ＴＰ４から出土した。19は染付輪花皿である。削り出しの高台で，花弁状の体部をなす。高台内側に砂目の痕跡を残す。20は縄文土器の口縁部であろう。端部に２条の刺突連点文と，屈曲部には爪形文の上段に１条の刺突連点文を配している。胎土はにぶい褐色を呈し，石英・角閃石・白土粒などを含むが雲母は見当たらない。内部と口縁部は黒く煤けている。21はばち形をした打製石器である。頁岩製で17.2ｇを計る。

(2) ま と め

今回の調査は，丘陵部分で柱穴，土壙などの遺構を８箇所のグリットで確認した。低地部分は，ＴＰ９，10，11，15，26で遺物包含層は見られたが，遺構は検出できなかった。

遺物は旧石器時代の石器，縄文時代前期の土器・石器，古代の須恵器，中世から近世までの貿易陶磁器，国産陶磁器，土師器，瓦質土器，石製品など約2,800点，パンコンテナ10箱分が出土した。

特に，丘陵部分のグリット(第７図) ＴＰ６の炭化小豆や柱穴群の検出，ＴＰ７ＮのＳＫ－１から検出した13世紀頃の中国龍泉窯系青磁片と無数の炭化米は，中世初頭に何等かの施設の存在を予期させる。

以上のことから，遺跡の範囲（第６図）は，ＴＰ１～11，15，26を含む範囲が想定され，工事に先立って，協議を行う必要がある。

参考文献

森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』1978
北野隆亮「15・16世紀の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究№10』1990
中世土器研究会『概説中世の土器・陶磁器』真陽社1995

3．本調査（平成９年度）

(1)　Ⅰ～Ⅲ区の調査（県教委担当）概要

①調査関係者　調査関係者は以下のとおりである。

原の辻遺跡調査事務所　所長　田川　肇　課長　安楽　勉・岩永　道雄　主査　松嶋　繁昭

文化財保護主事　川口　洋平（調査担当）

②調査方法（第９図）　調査は，工事にかかる区域が分散するため位置的にⅠ～Ⅴ区と大別して行うこととした。県教委はⅠ～Ⅲ区を，芦辺町教委はⅣ～Ⅴ区をそれぞれ担当した。それぞれの区においては，10m間隔を基本として県はA～U区，町はａ～ｏまでの調査区を設定した。これは調査に着手した順に設定したため，県担当区ではⅡ区（A～E），Ⅰ区（F～I），Ⅲ区（J～U）の順となっている。町担当区はⅣ区（ａ～ｋ），Ⅴ区（１～ｏ）である。県担当区の調査は，平成９年11月12日～平成10年３月６日にかけて実施した。掘り下げは，表土を機械で行い，以下を人力によった。遺物包含層および遺構については，精査を行った。Ⅰ～Ⅲ区の調査面積は867.8m²である。

③Ⅰ区の調査

土層（第11図）　土層は次のとおりである。第１層は暗茶褐色で水田の作土である。第２層は暗茶褐色の粘質土である。第３ａ層は第２層に似るが，やや暗い色調である。第３ｂ層は黒褐色の粘土ブロックである。第４層は炭化物を含む軟らかい暗茶褐色土で，以下は赤褐色の基盤層である。第２層から第４層までは，古墳時代から中世の遺物を含んでいるが，層位的な時期差は認められない。このことから，西側の山を削った際の流れ込みの遺物と考えられる。

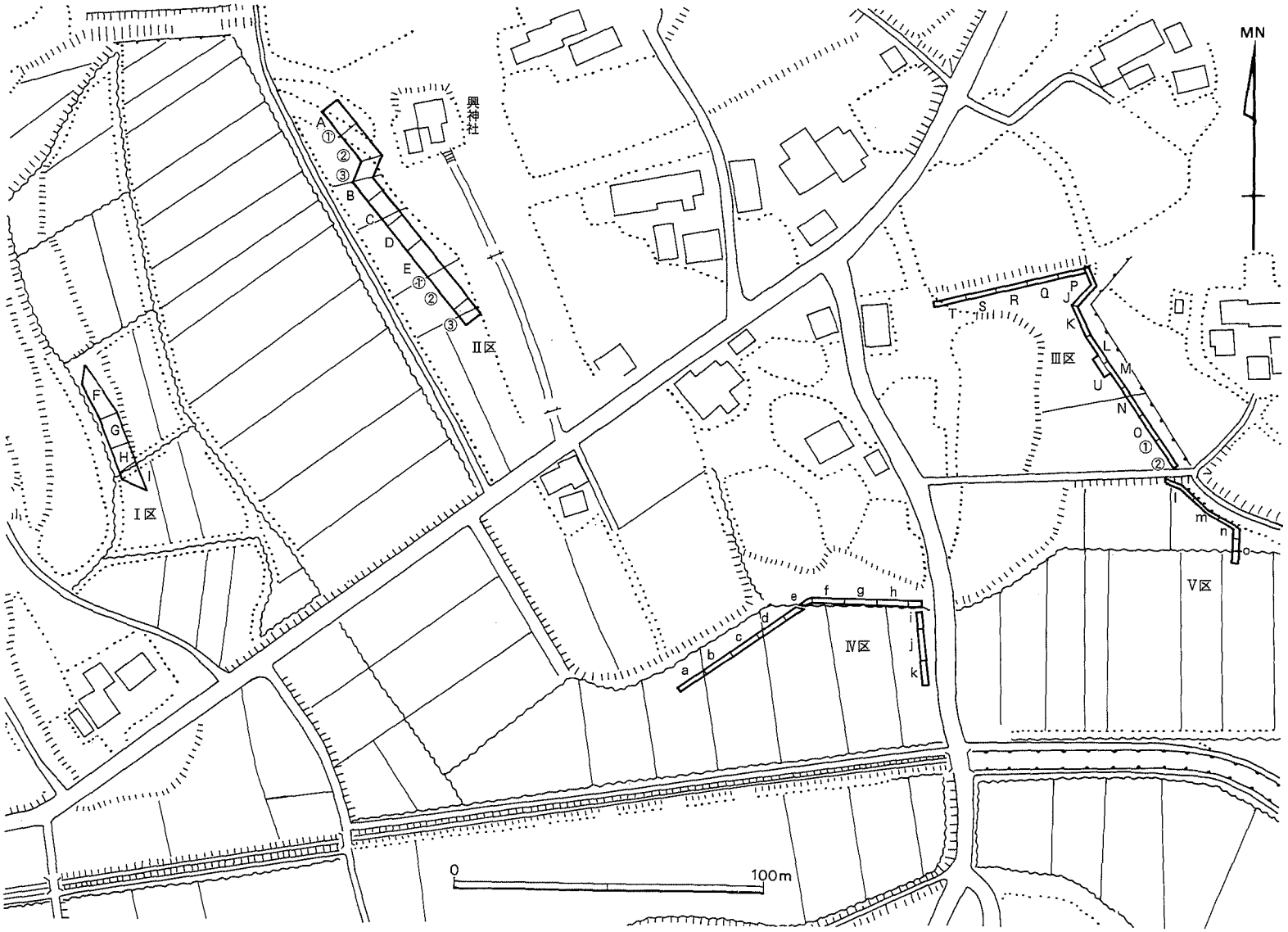
遺構・遺物（第14図）　Ⅰ区では遺構は確認されなかった。遺物は，990点が出土した。内訳は中国・朝鮮半島の陶磁器が192点，国産の須恵器，土師器などの土器が792点，黒耀石などそのほかの遺物が６点となっている。ほとんどが細片であった。

④Ⅱ区の調査

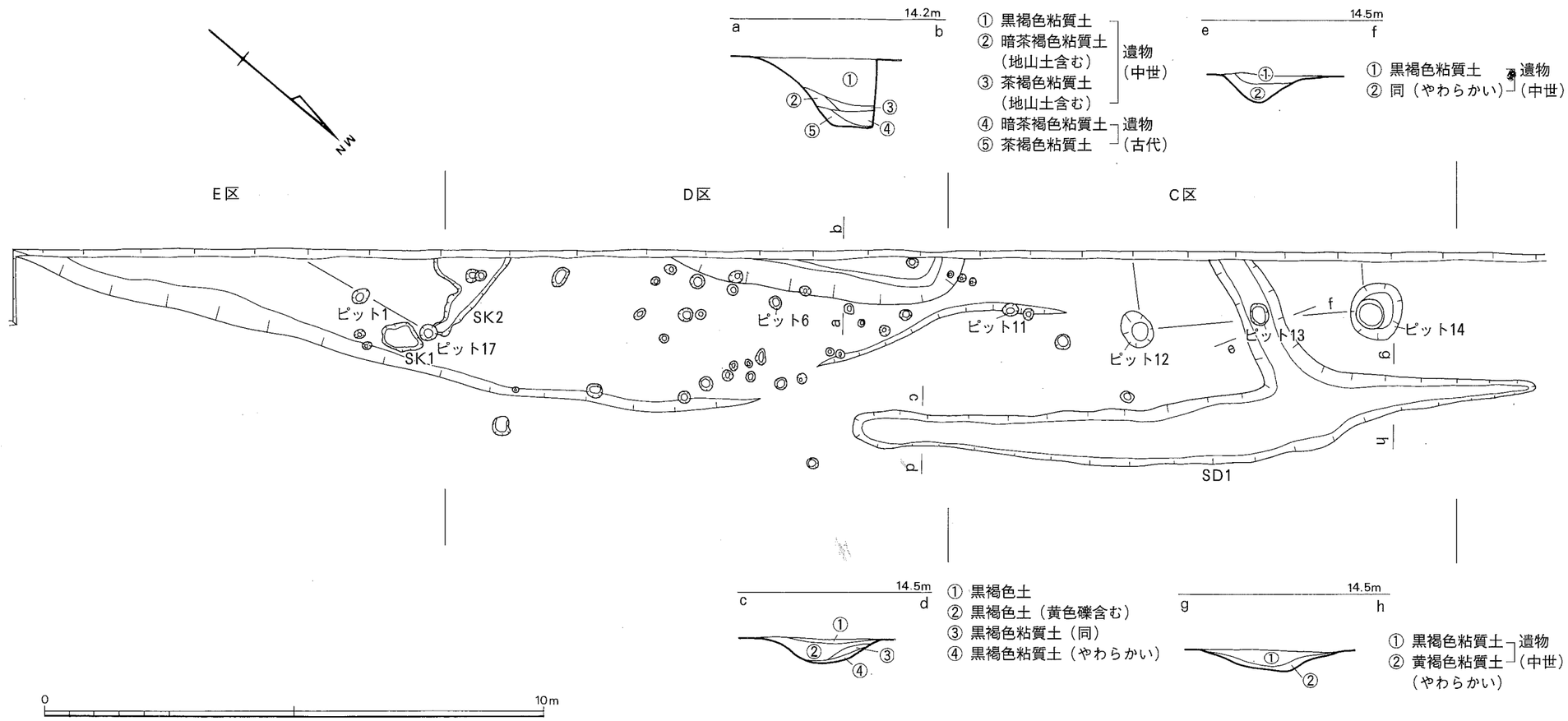
土層（第11図）　土層は次のとおりである。第１層は茶褐色土で水田の作土である。第２層は黒褐色土で，鉄分が浸透・沈着した層である。一部にしか認められなかった。第３層は暗黒褐色土で，調査区の西側に堆積が認められた古墳時代から中世にかけての遺物包含層である。東側は削平により第１層の下が基盤層となっていた。西側の深い箇所では第３層が厚く堆積し，一部に色や質が異なる部分も認められたが時期的な差異はなく，東側の台地を削平した際の流れ込みによる堆積と考えられる。

遺構（第10・12図）　遺構は，溝状遺構（ＳＤ１），土壙（ＳＫ１・２），ピットが確認された。ＳＤ１は，粘質土の堆積が認められ水が流れていたと考えられる。出土遺物から14～15世紀に埋まったと考えられる。ＳＫ１・２は隣接して確認され，それぞれ土師器の杯とⅢがふたつづつ埋納されていた。地鎮などの祭祀が行われた可能性がある。時期については検討が必要であるが，一応，白磁Ⅳ類に伴う時期と考えたい。ピットについては，一部に建物と思われる配列も認められた。

遺物（第13・14図）　遺物は5,008点が出土した。Ｄ区からはうち3,795点が出土し集中する傾向が認められる。Ⅱ区全体の内訳は，貿易陶磁器584点，国産土器4,351点，そのほか73点である。

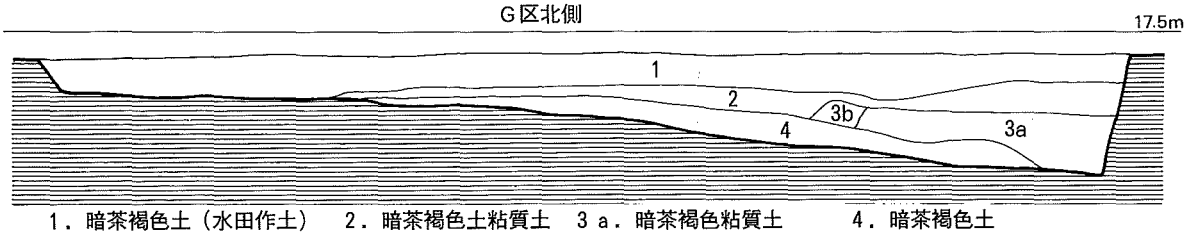


第９図　調査区域図（１／2,000）



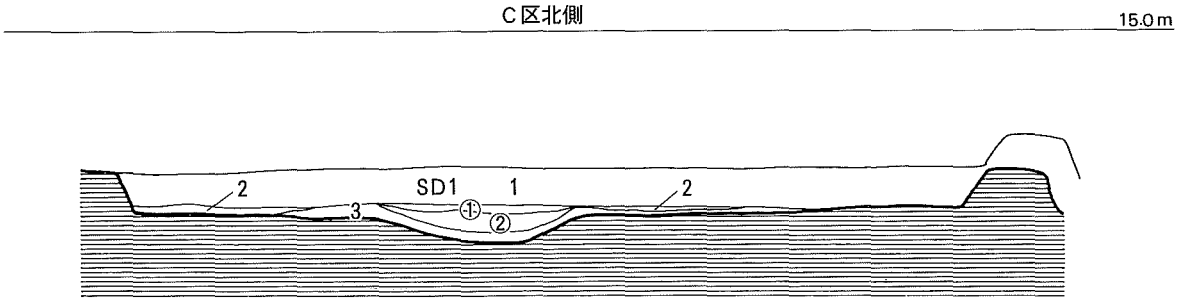
第10図　Ⅱ区・遺構実測図（1／100）

G区北側



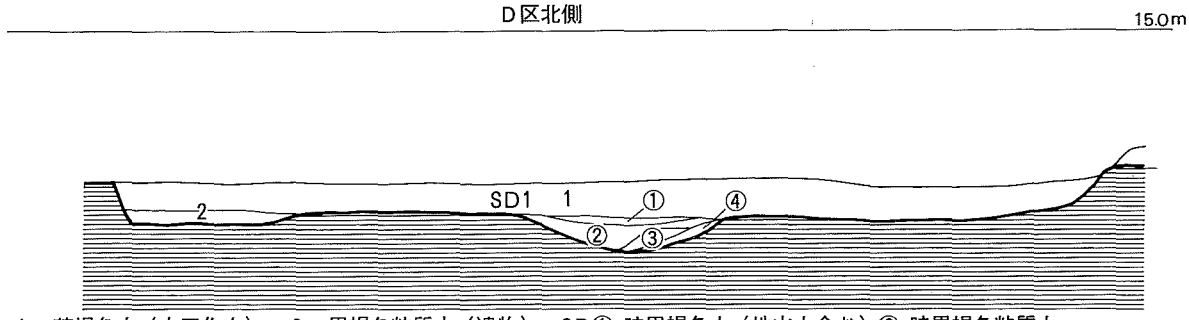
1．暗茶褐色土（水田作土）　2．暗茶褐色土粘質土　3 a．暗茶褐色粘質土　4．暗茶褐色土
b．黒褐色粘土ブロック

C区北側



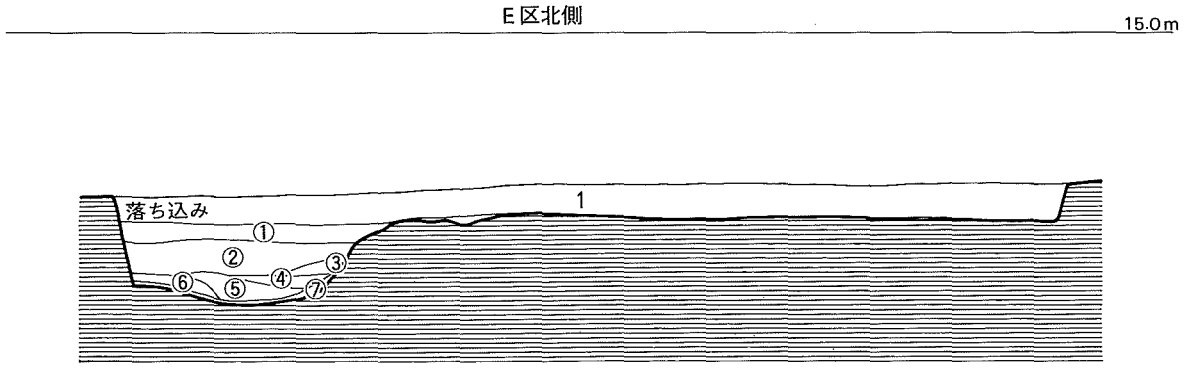
1．茶褐色土（水田作土）　2．黒褐色土（Fe・水田床土）　3．暗橙色風化礫　SD① 暗黒褐色土
② 暗黒褐色粘質土（遺物）

D区北側



1．茶褐色土（水田作土）　2．黒褐色粘質土（遺物）　SD① 暗黒褐色土（地山土含む）② 暗黒褐色粘質土
③ 同（かたい）
④ 同（遺物多い）
遺物（中世前期）

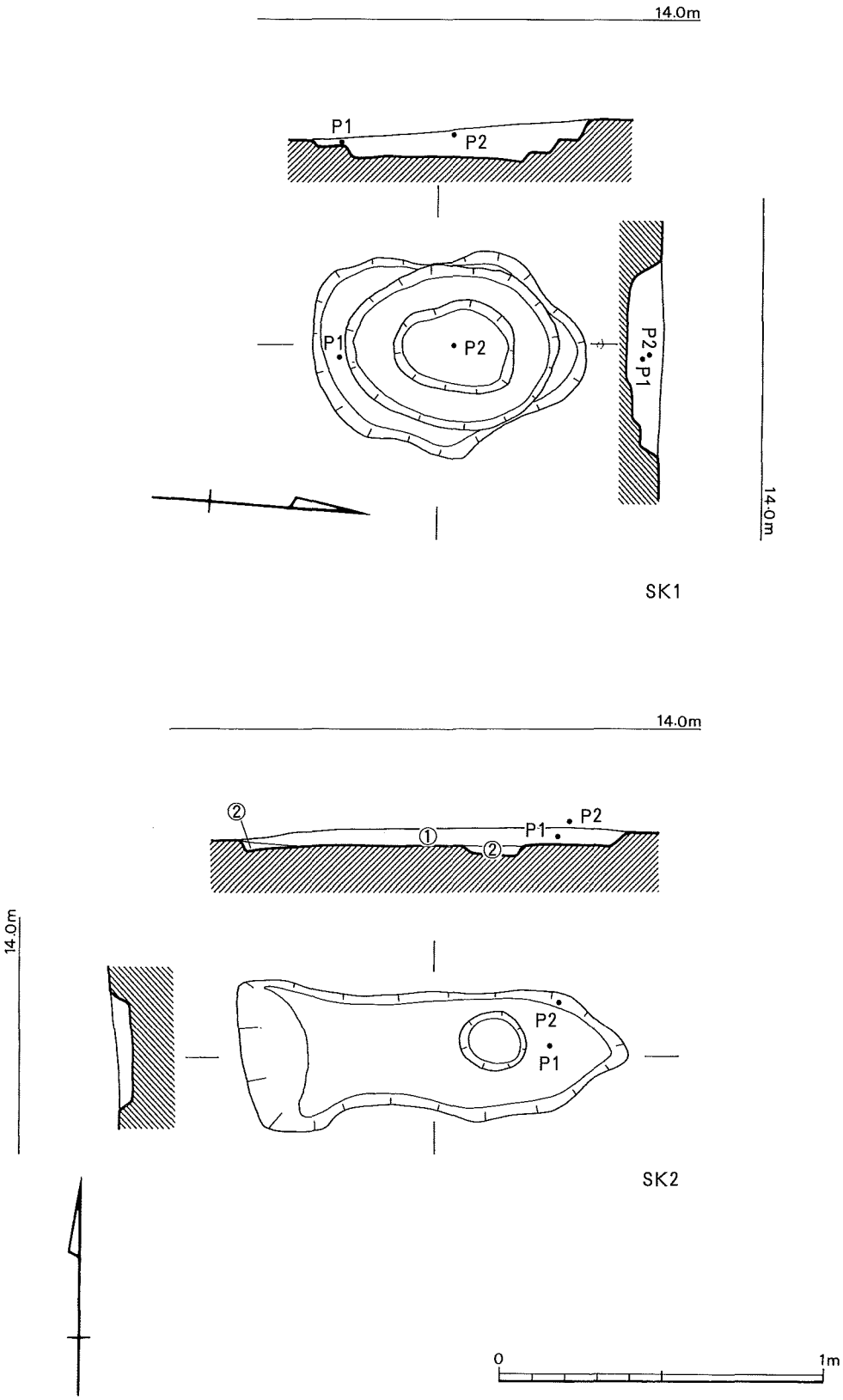
E区北側



1．茶褐色土（水田作土）
落ち込み
① 暗黒褐色土
② 同（やや茶）
③ 同（黄色土混じる）
④ 黄褐色土
⑤ 暗茶褐色土
⑥ 黄褐色土
⑦ 黄褐色粘質土
遺物

0　2m

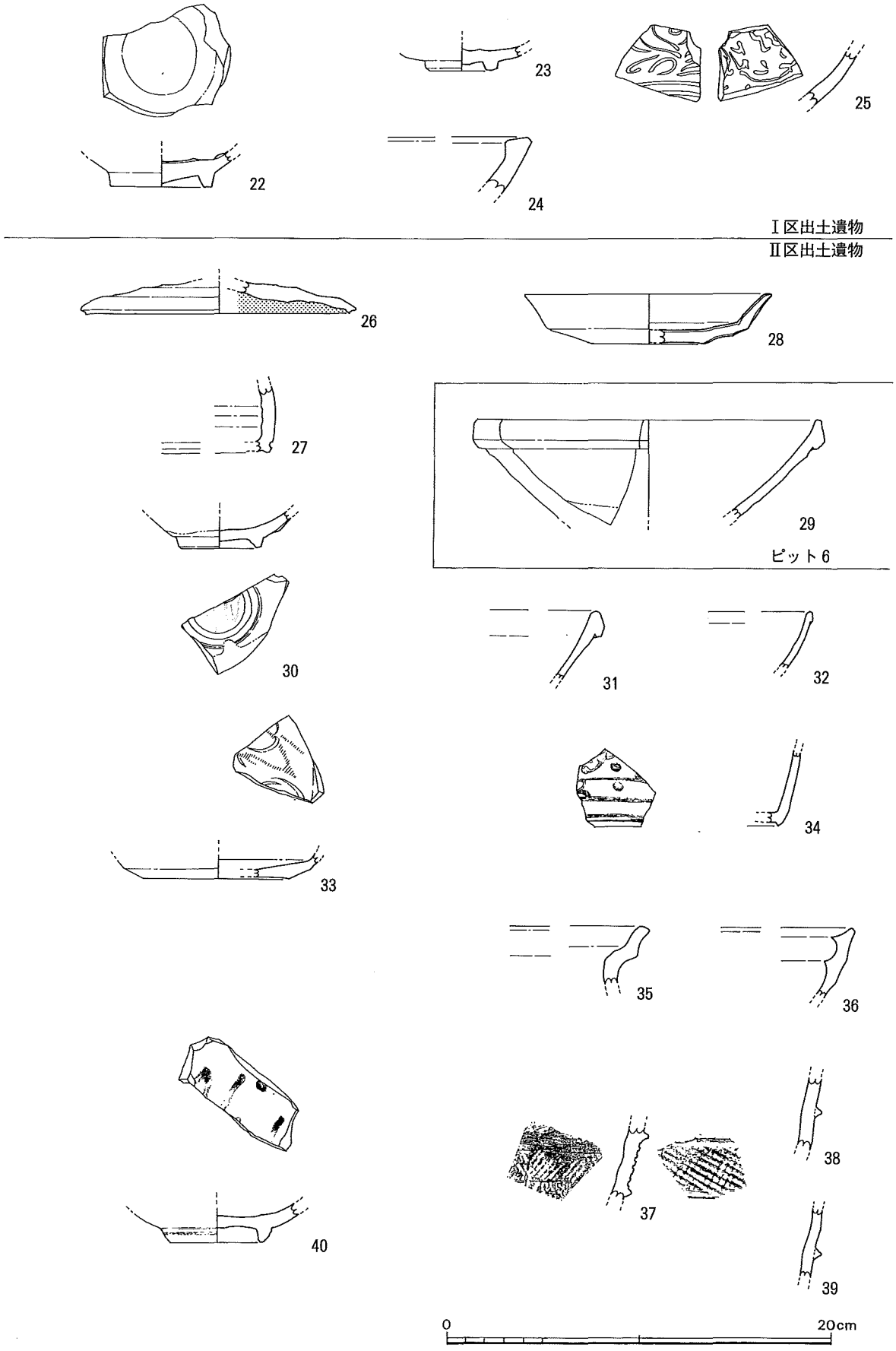
第11図　Ⅰ・Ⅱ区土層図（1／40）



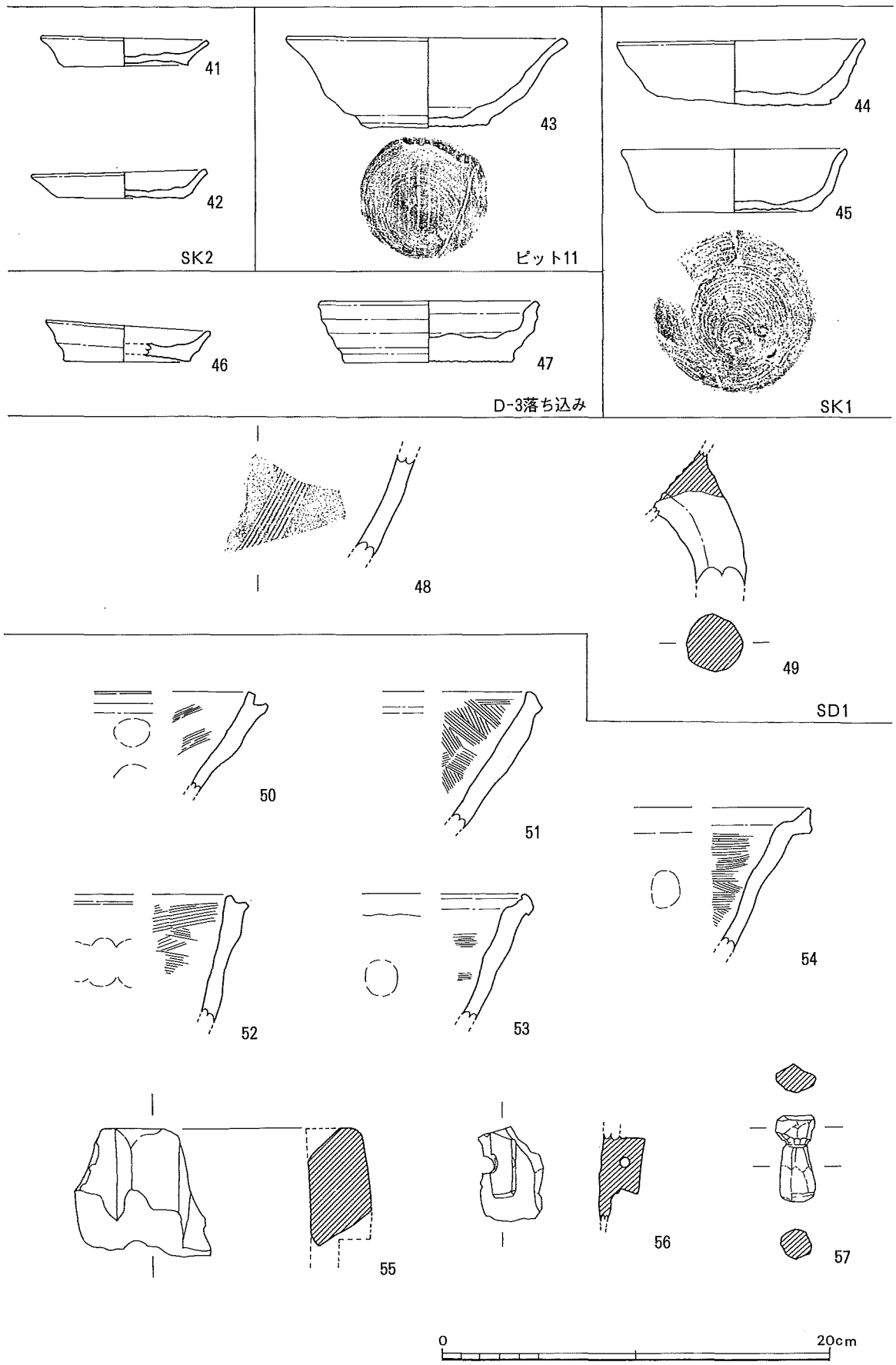
第12図　II区遺構実測図（1／20）

番号	種　　別	出土区・層位	特　　徴
22	白　磁　碗	G・2	胎土白灰色，焼成甘い，乳白色釉，Ⅷ類か
23	白　磁　皿	H・2	胎土黄白灰色陶器質，乳白色釉，底部露胎，D群
24	瓦質すり鉢	H・2	胎土粗く焼成甘い，器表風化，周防系
25	粉青沙器	H・2	胎土灰色，白土により象嵌
26	須恵器杯蓋	E・3	胎土青灰色，焼成並，内側を硯に転用，８C代
27	緑釉陶器	D・3	胎土黄白灰色，淡緑色釉，器形小壷か，近江系か
28	白　磁　皿	E・3	胎土白灰色，緑がかった白色釉，底部露胎，V類
29	白　磁　碗	ピット６	胎土白灰色，白灰色釉，底部露胎，Ⅳ類
30	白　磁　碗	B・1	胎土黄白灰色，白灰色釉，高台内に墨書，Ⅳ類に併行か
31	白　磁　碗	D・3	胎土白灰色，白灰色釉，Ⅳ類
32	白　磁　碗	D・3	胎土灰色，汚れた白灰色釉，Ⅱ類
33	青　磁　皿	D・3	胎土暗灰色，暗緑灰色釉，同安窯系
34	青　花　盃	A・1	胎土白灰色，暗青色の呉須，発色悪く中国南部産か
35	灰釉陶器	E・3	胎土粗く石英粒，暗緑灰色釉，複合口縁壷，朝鮮系
36	陶　器　鉢	E・3	胎土青灰色，焼成並，中国産か
37	無釉陶器	E・3	胎土あずき色，焼成堅緻，タタキ調整，朝鮮系
38	無釉陶器	E・3	同
39	無釉陶器	E・3	同
40	伊万里碗	A・1	胎土白色，焼成良，雲龍荒磯文碗か，大橋Ⅲ期
41	土　師　皿	SK２・P１	口径8.6cm，底径6.4cm，器高1.3cm，明褐灰，赤色粒
42	土　師　皿	SK２・P２	口径8.4cm，底径6.0cm，器高1.3cm，橙，赤色粒
43	土　師　杯	ピット11	口径14.2cm，底径6.2cm，器高4.6cm，橙
44	土　師　杯	SK１・P１	口径12.6cm，底径9.0cm，器高3.2cm，にぶい橙，赤色粒
45	土　師　杯	SK１・P２	口径(11.4)cm，底径6.8cm，器高3.2cm，橙
46	土　師　皿	D・３落	口径8.9cm，底径6.8cm，器高1.9cm，灰白，粗いつくり
47	土　師　杯	D・３落	口径11.2cm，底径8.4cm，器高3.1cm，橙
48	瓦質すり鉢	C・SD１	胎土比較的密で黄灰色
49	瓦質足鍋	C・SD１	胎土粗く砂粒含む，内面タタキ
50	瓦　質　鍋	E・2	胎土黄白灰色，外面に煤付着
51	瓦　質　鍋	E・3	同
52	瓦　質　鍋	E・2	同
53	瓦　質　鍋	E・3	同
54	瓦　質　鍋	E・3	同
55	滑石製石鍋	D・3	木戸雅寿IIｂ類（11C後半）
56	滑石製品	E・3	転用
57	滑石製品	E・3	転用，仏像か

表２　Ⅰ・Ⅱ区出土の遺物観察表



第13図　Ⅰ・Ⅱ区出土の遺物（1／3）



第14図　II区出土の遺物（1／3）

⑤Ⅲ区の調査

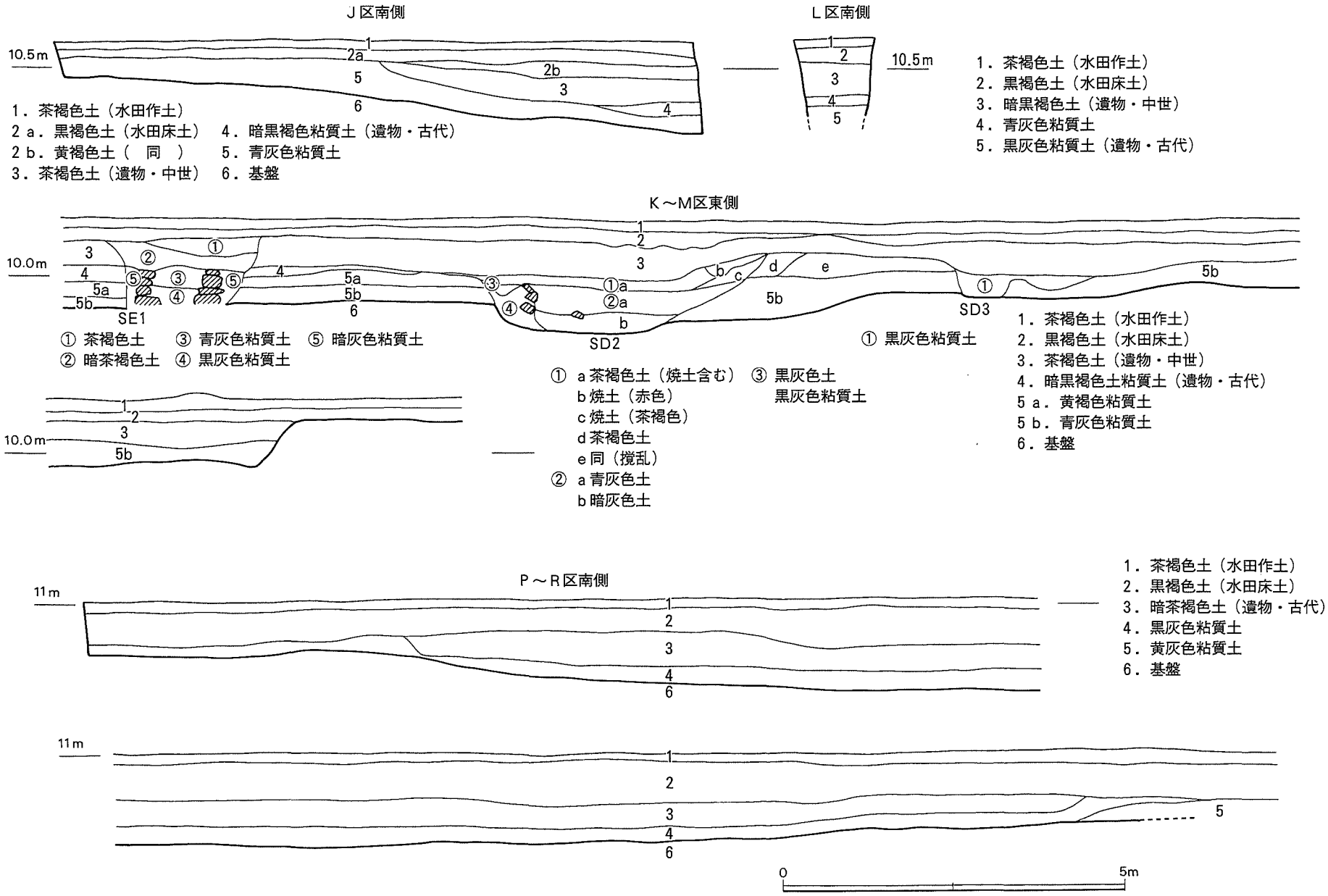
土層（第15図）　Ｋ区の土層は次のとおりである。第１層は水田の作土，第２層は水田の床土で，共に客土である。第２層は下部が黄茶褐色土となっている（２ｂ）。第３層は暗茶褐色土で，古墳時代から中世の遺物包含層である。第４層は暗黒褐色の粘質土で，古代の遺物包含層である。第５層は青灰色の粘質土で，一部黄褐色を呈する。第６層は基盤層である。遺物包含層は，いずれも東側台地の削平で流れ込んだものと考えられる。

Ｌ～Ｎ区の土層は次のとおりである。第１層と第２層は前記に共通した客土である。第３層も暗茶褐色土で古墳時代から中世の遺物包含層で前記と共通する。第４層も暗黒褐色粘質土で，前記と共通の古代の遺物包含層である。第５層は粘質土で，黄褐色の部分（５ａ）と青灰色の部分（５ｂ）とに分けられる。第６層は基盤層である。やはり遺物包含層は，東側の台地削平の際の流れ込みと考えられる。

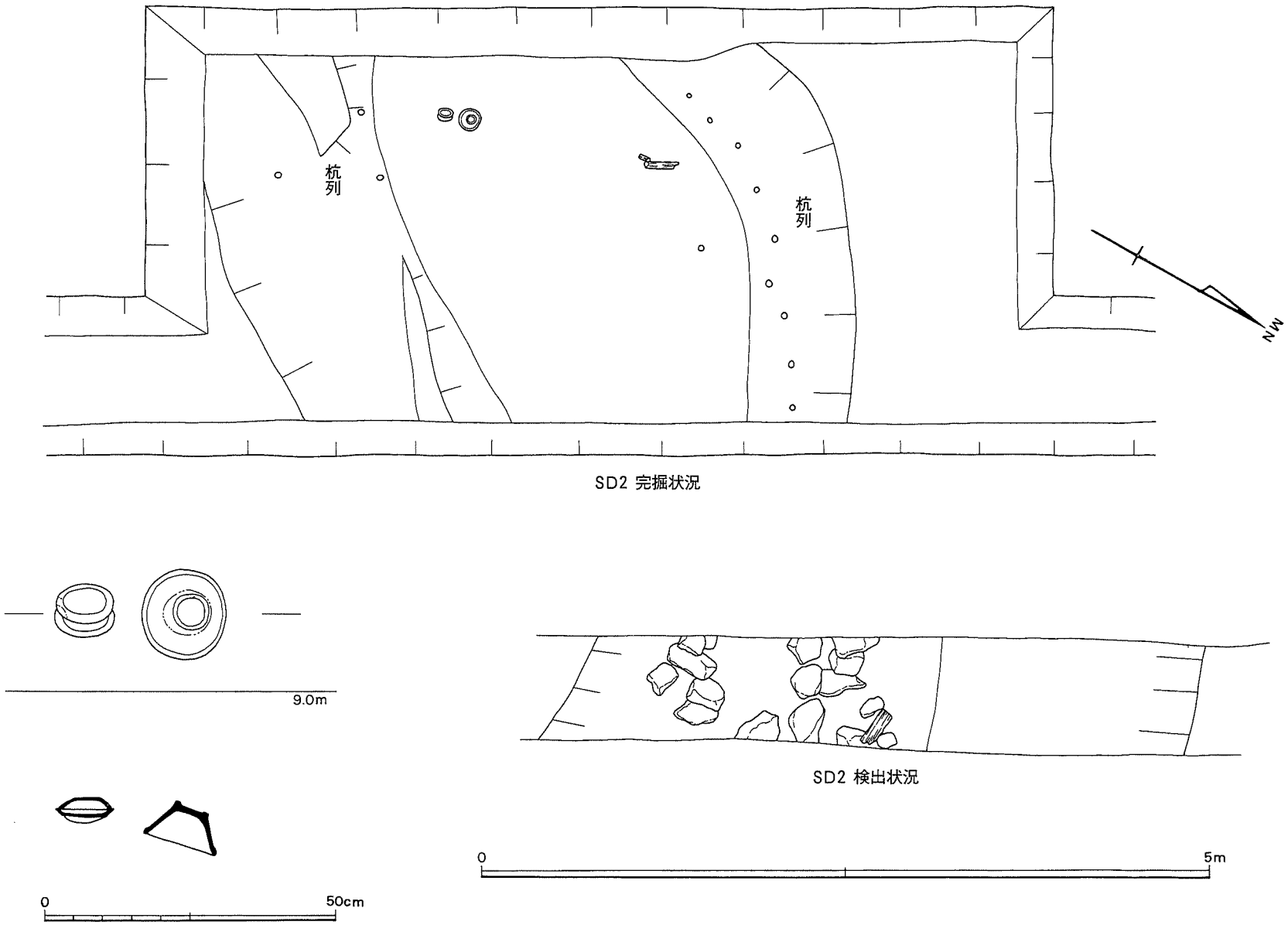
Ｐ～Ｓ区の土層は次のとおりである。第１層と第２層は前記に共通した客土である。第３層は茶褐色土で，古代の遺物包含層であるが，わずかに古墳時代後期の遺物を含む。第４層は黒灰色の粘質土であるが，遺物は含まれない。第５層は基盤層である。

遺構（第15・16図）　遺構はＬ～Ｍにおいて，井戸（ＳＥ１），溝状遺構（ＳＤ２・３）が確認された。調査区の狭さと涌水のため，遺構の検出には困難を伴った。ＳＥ１は，第３層を切ってつくられている。遺物は少なく，はっきりとした時期は不明であるが，近世のものであろうか。ＳＤ２は，幅約４ｍ，深さ約１ｍの溝で，底の両側に杭列が認められた。検出時には，人頭大の石が多く確認されたが，もとは杭により固定され護岸されていたものと考えられる。中の土層は粘質土で，水が流れていたことがわかる。西側の底で白磁Ⅳ類と土師皿の埋納が確認されたが，溝の廃棄の際に祭祀を行ったものと考えられる。溝の時期は，古代の遺物包含層を切っていることと出土遺物から，平安時代末から鎌倉時代初頭頃に使用され埋められたと考えられる。また，溝の南側の掘りかたには，溝を掘った際の堆積と思われる土層が観察されたことを記しておく。ＳＤ３は黒灰色粘質土が認められたが，遺物は出土していない。自然流路とも考えられる。

遺物（第18図）　遺物は3,520点が出土した。内訳は貿易陶磁器238点，国産土器3,228点，その他54点となっている。ＳＤ２の遺物出土状況をみると，貿易陶磁器21点，国産土器189点，その他５点となっている。時期幅が長いため，土器・陶磁器の組成を分析するのは困難であるが，量的な傾向を概観すると，古代では８世紀頃にひとつのピークがあり，土師器の杯・甕，須恵器の杯，壺などが主体となっており，一部に製塩土器や蔵骨器もみられる。９世紀代の遺物は少なく，10世紀にはやや資料が増えはじめる。少数であるが出土する緑釉陶器は，この時期に位置づけられるものと考えられる。生産地としては近江，東濃などが推測される。朝鮮系の無釉陶器もこの時期に相当するものであろう。しかし，11世紀代までは散発的な出方にとどまっている。つづく12世紀代は，ひとつのピークである。中国産のものでは白磁Ⅱ，Ⅳ類の出土が目立つ。初期高麗青磁も含まれる。龍泉窯系青磁は，相対的に少なく，12世紀後半から13世紀にかけて資料は減少する。



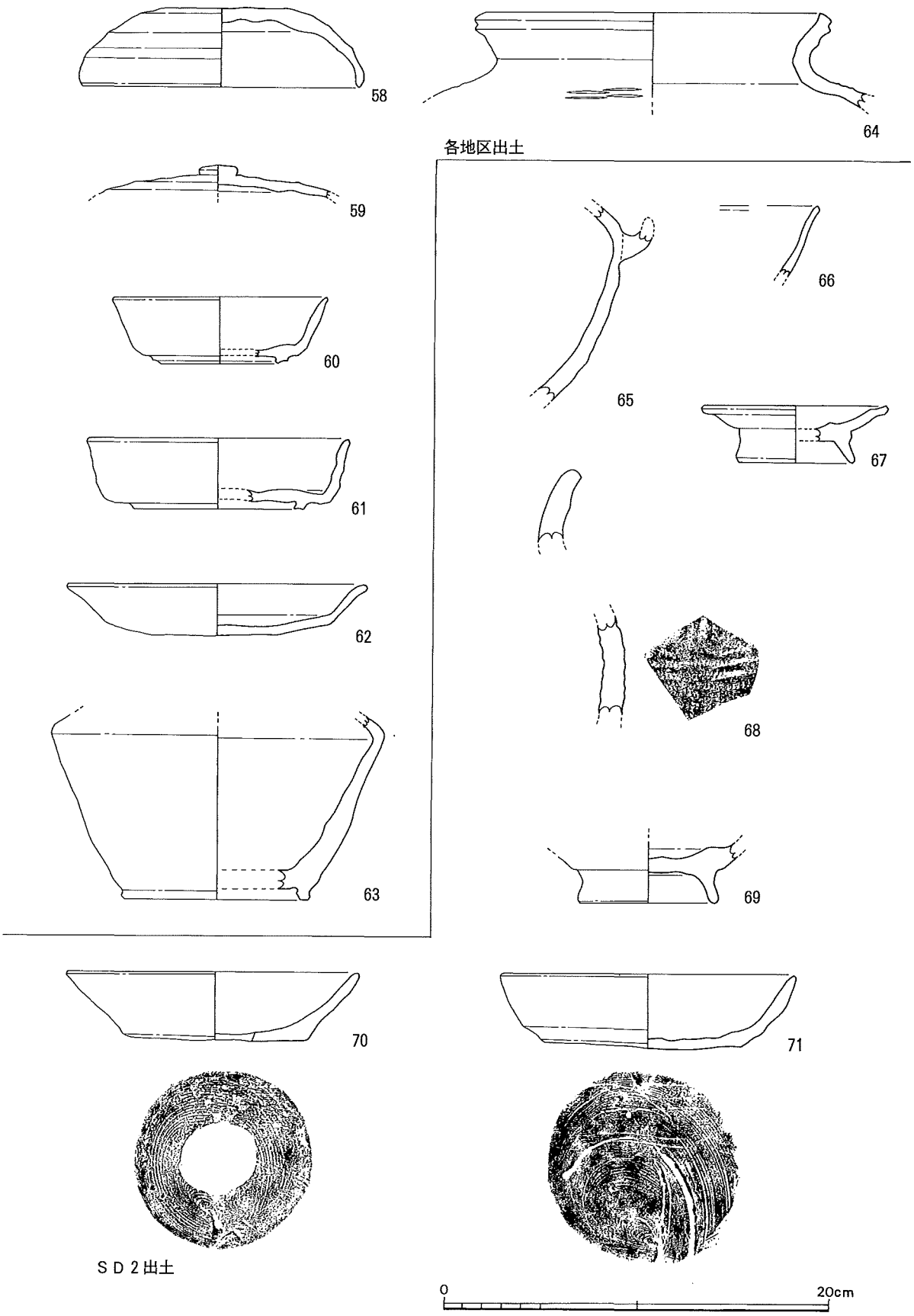
第15図　Ⅲ区・土層図（1／80）



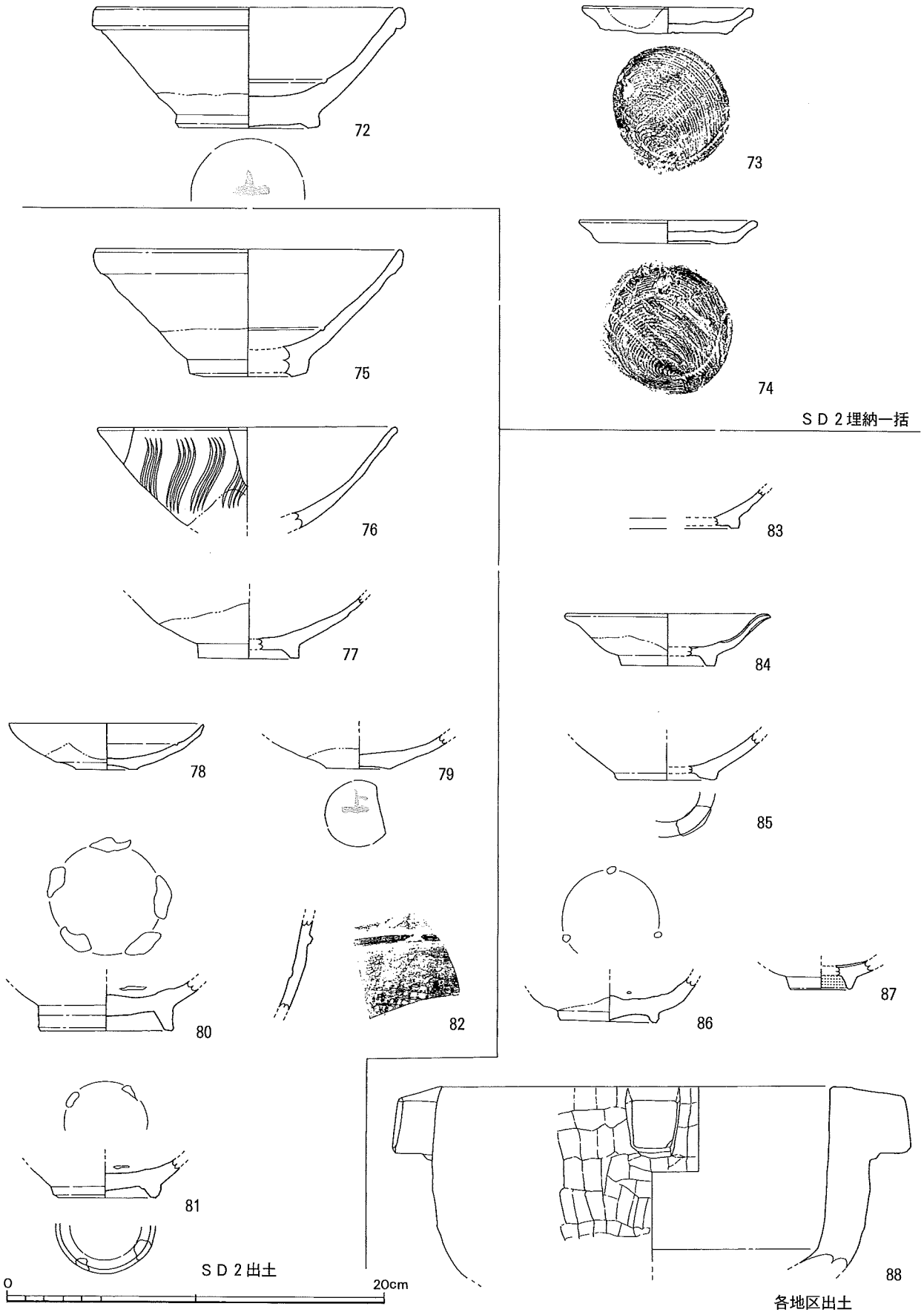
第16図　Ⅲ区の遺構・遺物出土状況（1／40・1／10）

番号	種　　別	出土区・層位	特　　徴
58	須恵器杯蓋	M・2	胎土青灰色，焼成良，小田富士雄III期
59	須恵器杯蓋	M・3	胎土灰色，石英・長石粒含む，焼成良，８Ｃ
60	須恵器杯身	M・2	胎土灰色，長石粒，焼成良，内容物付着，８Ｃ
61	須恵器杯身	U・3	胎土灰色，長石粒，焼成甘い，８Ｃ
62	須恵器皿	M・3	胎土灰色，石英・長石粒含む，ヘラ切離し
63	須恵器壷	M・3	胎土灰色，石英・長石粒含む，焼成並，８Ｃ
64	須恵器甕	N・2	胎土暗灰色，焼成並，タタキ
65	須恵器壷	ＳＤ２	胎土暗青灰色，器肉あずき色，焼成良，蔵骨器
66	緑釉陶器	ＳＤ２	胎土須恵質，釉は銀化し暗灰色を呈す
67	土師器器台	ＳＤ２	胎土精良，焼成良，にぶい橙
68	製塩土器	ＳＤ２	胎土粗く砂粒，焼成甘い，玄海灘式
69	土師器杯	ＳＤ２	胎土に黒雲母，焼成やや甘い，にぶい橙
70	土　師　杯	ＳＤ２	口径14.8cm，底径9.6cm，器高3.6cm，にぶい橙，穿孔
71	土　師　杯	ＳＤ２	口径15.2cm，底径9.6cm，器高4.8cm，にぶい橙
72	白　磁　碗	ＳＤ２	胎土白色，白灰色釉，底部露胎，粗いつくり，IV類
73	土　師　皿	ＳＤ２	口径9.0cm，底径6.2cm，器高1.4cm，にぶい褐
74	土　師　皿	ＳＤ２	口径9.6cm，底径7.6cm，器高1.2cm，にぶい褐
75	白　磁　碗	ＳＤ２	胎土白色，白灰色釉，底部露胎，IV類
76	白　磁　碗	ＳＤ２	胎土白色，白灰色釉，Ｖ類
77	白　磁　碗	ＳＤ２	胎土白灰色，乳白色釉，底部露胎，II類
78	白　磁　皿	ＳＤ２	胎土白灰色，白灰色釉，底部露胎，IV～Ｖ類
79	白　磁　皿	ＳＤ２	胎土白灰色，黄白灰色釉，底部露胎，墨書，IV～Ｖ類
80	青　磁　碗	ＳＤ２	胎土灰色，暗緑色釉，焼成良，畳付露胎，初期高麗
81	青　磁　碗	ＳＤ２	胎土粗く灰色，緑灰色釉，初期高麗
82	無釉陶器	ＳＤ２	胎土あずき色，焼成良，タタキ
83	緑釉陶器	U・3	胎土須恵質，濃緑色釉，削り高台，京都系か
84	白　磁　盃	L・3	胎土灰色，白灰色釉，底部露胎，見込み蛇の目釉剝ぎ
85	青　磁　碗	L・3	胎土灰色で粗い，焼成良，緑灰色釉，初期高麗
86	雑釉陶器	L・3	胎土灰色で粗い，暗緑灰色釉，灯明皿に転用か，李朝
87	青　磁　碗	U・3	胎土白灰色，緑灰色釉，高台内鉄錆，ベトナム産か
88	滑石製石鍋	K・3	木戸IIｂ類

表３　III区出土の遺物観察表



第17図　Ⅲ区出土の遺物①（１／３）



第18図　Ⅲ区出土の遺物②（１／３）

(2) Ⅳ～Ⅴ区の調査（芦辺教委担当）概要

①調査関係者　調査関係者は以下のとおりである。

芦辺町教育委員会　教　育　長　川原　忠雄　　教育次長　辻本　　正

社会教育係長　山口　信幸　　文化財指導員　松永　泰彦（現場調査担当）

②調査の方法（第９図）　調査は受益者負担（20%）の割合から，調査予定面積215m²を調査担当者との協議によりⅣ・Ⅴ区を担当した。調査期間は平成10年２月20日～平成10年３月31日までとなった。掘り下げは，トレンチ幅が１m前後と狭く表土剝ぎから人力で行った。遺物包含層の遺物はドットで取り上げた。Ⅳ～Ⅴ区の調査面積は311.17m²である。

③Ⅳ区の調査

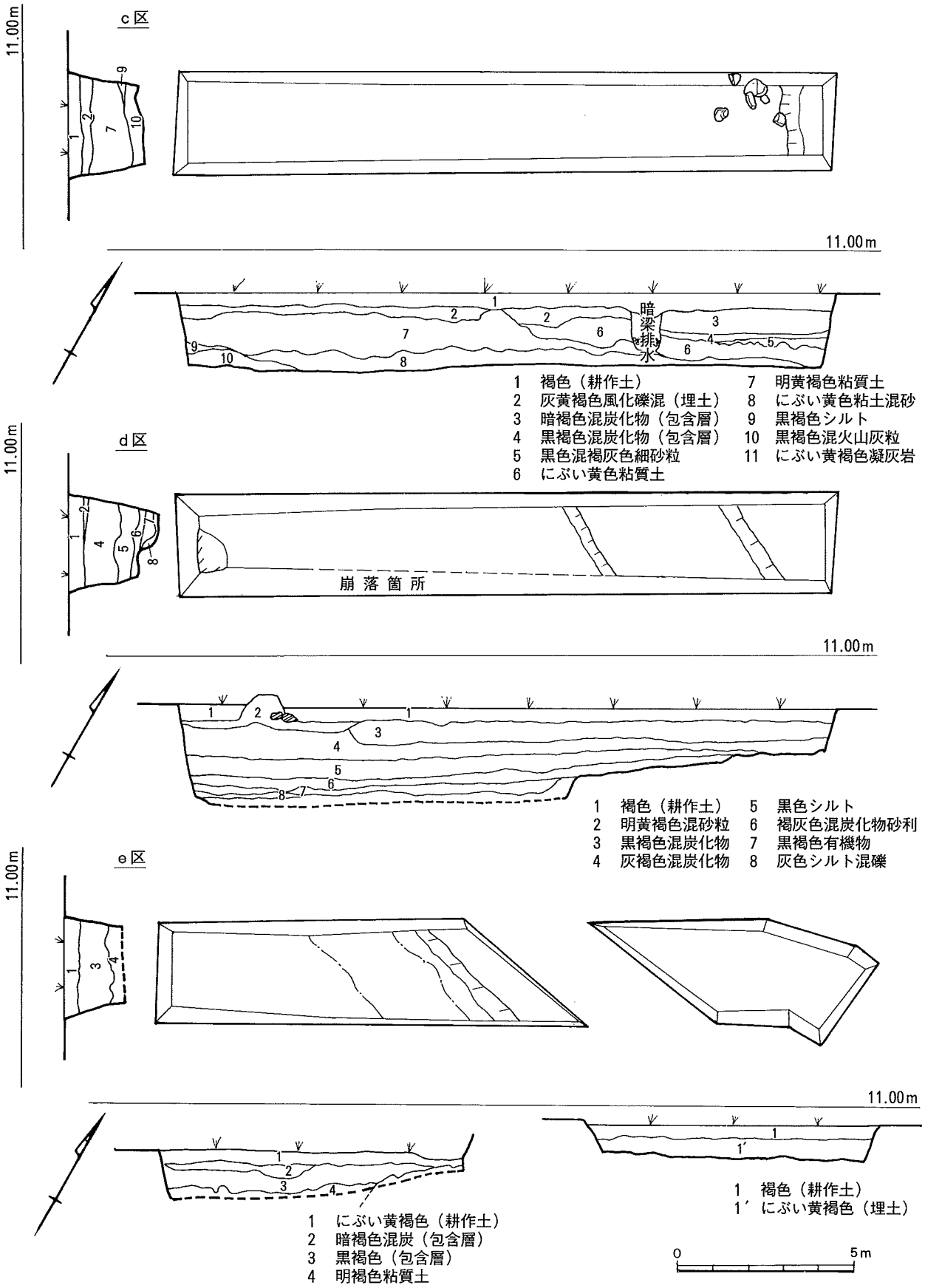
土層（第19図）　土層は包含層の確認できたｄ区について述べる。第１層が褐色の耕作土である。第２層は明黄褐色の埋土層である。第３層は炭化物を含む黒褐色の包含層である。第４層は，第３層よりやや濃い目の黒褐色層で，炭化物を含む包含層である。第５層は黒色シルトで須恵器の杯などが出土した。明確な時期差は見れなかったが，３～５層で古代～中世までの遺物が含まれる。以下は図版を参照されたい。

遺構・遺物（第20図）　Ⅳ区での遺構は，ｈ区で柱穴８個を検出した。ｄ～ｅ区では，包含層を持つ谷状落ち込みが見られた。新しいもので，ｈ区東側からｉ区にかけて検出した不整形の土坑がある。中世の陶磁器片などを包蔵するが，この付近に瓦工場があった頃の，原料の瓦土の採掘坑と考える。また，ａ・ｂ・ｃ各区で水田の暗渠排水の溝をそれぞれ一条検出した。遺物は，3,226点が出土した。内訳は中国・朝鮮半島の陶磁器が504点，国産の須恵器・土師器などの土器が2,553点，石鍋などその他の遺物が169点出土した。

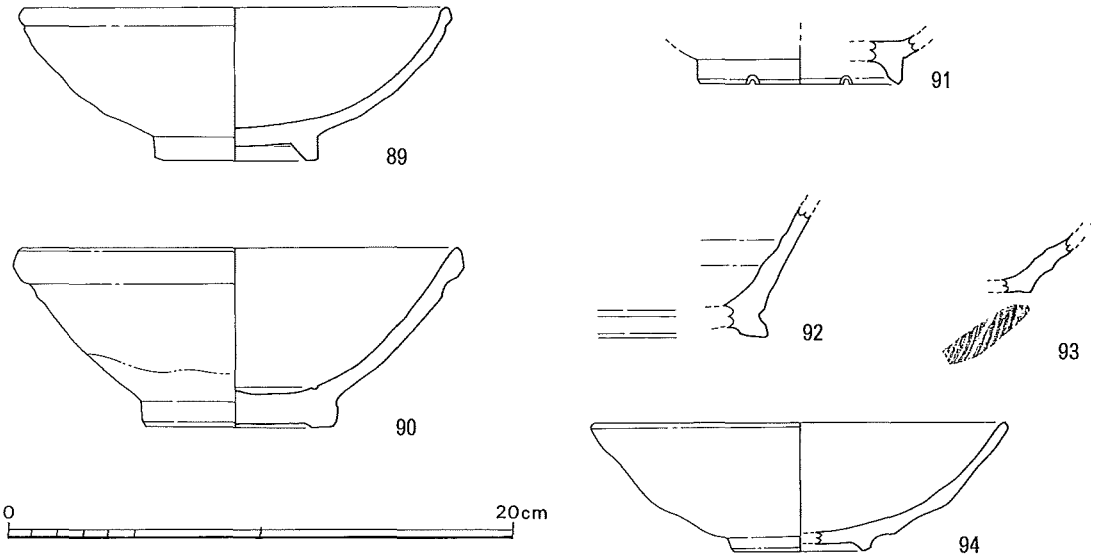
④Ⅴ区の調査

土層　Ⅴ区では，１～ｎ区は丘陵裾のカット部分にあたり，表土直下は溶岩風化土層の地山となっていた。ｏ区に至るとカットは免れ，水田部に地山が下がっていくのがわかる。基本的な土層は，第１層がにぶい黄褐色の耕作土である。第２層は暗褐色土で水稲の根がめだつ。第３層は黒褐色で拳大の礫を伴う包含層である。龍泉窯系青磁碗Ⅰ-５.ｂ類から明染付・唐津系折縁皿などを包含する。第４層は緑灰色砂質土で酸化すると浅黄色を呈する。

遺構・遺物　Ⅴ区では用途不明の土壙（ＳＸ-1）を検出した。直径約1.5m，深さ約0.5mの擂鉢状を呈する。石臼など大小の石礫が土壙内外を埋め尽くしていた。遺物は石礫間に包蔵されていた。Ⅴ区の総出土数は204点で，ｏ区から出土が大部分である。内訳は貿易陶磁器41点，国産土器・陶磁器127点，そのほか36点である。遺物は総じてⅠ～Ⅲ区と差異はなく，図化（第20図）も６点に止めた。89は白磁碗Ⅱ類である。高台は外面を直に，内面は斜めに削り出している。体部外面の中ほどまでヘラ削りの調整をなし，口縁部には小さめの玉縁を持つ。釉色は黄色味を帯びた白色で薄く全体に小さな貫入が走る。高台は，内外ともに露胎である。胎土は，灰白色で陶器に近い焼成である。90は白磁碗Ⅳ類である。高台は幅広く，削り出しが浅い，体部は口縁直下までヘラ削り調整を施す。



第19図　Ⅳ区土層・平面図（1／80）



第20図　Ⅳ・Ⅴ区の出土遺物（1／3）

釉色は黄味がかった白色で外面底部は露胎である。釉は小さな貫入が多くある。胎土は粗く陶器のような焼成である。91は緑釉陶器である。高めの有段輪高台で畳付にヘラ状の押圧痕が見られる。釉色は濃緑釉で全体に施す。胎土はにぶい黄橙色の軟陶である。92も緑釉である。壷の底部であろうか。釉色は淡黄緑を呈し，胎土は灰色で硬質である。93は篠窯系須恵器と思われる。回転糸切りを残す底部であるが，小片のため椀か鉢かは特定できない。94は瓦器椀である。断面三角形をした低めの高台を張り付けている。口縁部を内外面とも黒く燻している。

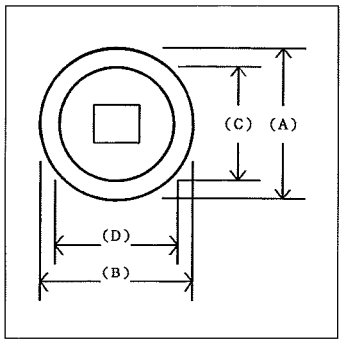
⑤小結

(1)　Ⅳ区より検出した谷状落ち込みは幅18m程あり，現況の小排水路とほぼ同じ位置を興神社の方へ入り込んでいるものと思われる。この谷状の落ち込み周辺は，範囲確認調査とあわせると緑釉陶器の出土数が9点になった。

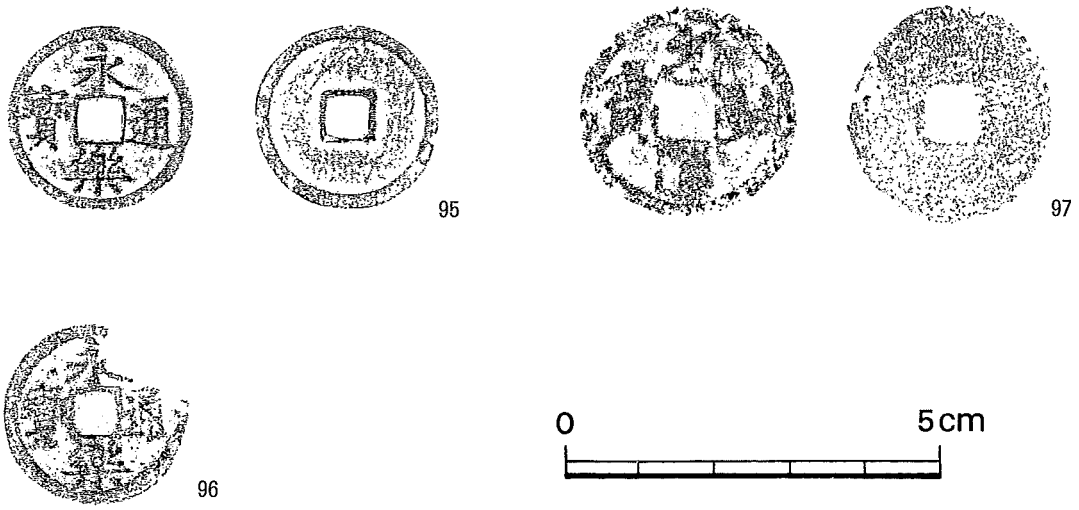
(2)　Ⅴ区から検出した土壙周辺は，石礫層に近世初頭の国産陶磁器の出土点数が比較的多く，初期唐津，初期伊万里，明染付なども共伴した。隣接の覩城跡の終り頃の時期と共通するものか。

(3) 出土銭貨

今回の調査で，３枚の銭貨が出土した。95は永樂通寶である。明銭で初鋳が1408年の真書体である。寸法はA2.50cm，B2.50cm,C2.11cm，D2.09cm，厚み0.16cm，重さ3.9ｇを計る。H区２層から出土した。96も一部欠くが永樂通寶の真書体である。寸法はA2.42cm，B2.48cm，C1.99cm，D2.02cm，厚さ0.14cm，重さ1.6ｇを計る。ｏ区３層（ＳＸ-1）から出土した。97は元□通宝の行書体である。判読できない部分が「祐」,「豊」,「符」の３通り考えられるがいずれも北宋銭である。寸法はA2.89cm，B2.94cm，C2.36cm，D2.38cm，厚さ1.95cm，重さ3.9ｇを計る。A区１層から出土した。



銭貨計測モデル



第21図　出土銭貨幣の拓影（１／１）

Ⅳ．まとめ

今回の調査において，判明した考古学的成果をまとめてみたい。Ⅰ区は今回の調査区が最も標高が高く斜面に位置するが，古墳時代から中世にかけての遺物包含層が確認された。包含層は西側の山を削平した際の流れ込みによるものと考えられる。時期的に遺物を概観すると，中世後期のものが多く，この時期が主体であると考えられる。

Ⅱ区においては，律令時代の資料として須恵器の杯蓋の転用硯の出土が注目されるが，この時期の遺物の量はごく少ない。量が多いのは中世のものである。12世紀代と考えられる遺構・遺物が確認された。中でもＳＫ１・２は，地鎮の際に行われたと考えられる祭祀遺構である可能性が高い。ほかに確認されたピットも，多くはこの時期のものと考えられる。出土遺物には，通常の生活にともなう石鍋や瓦質鍋も多く含まれており，屋敷や居館といった空間が想定される。遺物としては，この後減少し，これらのピットを切ってＳＤ１がつくられる。性格としては，規模などから屋敷の区画などが推測される。時期は15世紀前後に埋没したと考えられることから，Ⅰ区の出土傾向に対応するものとして興味深い。

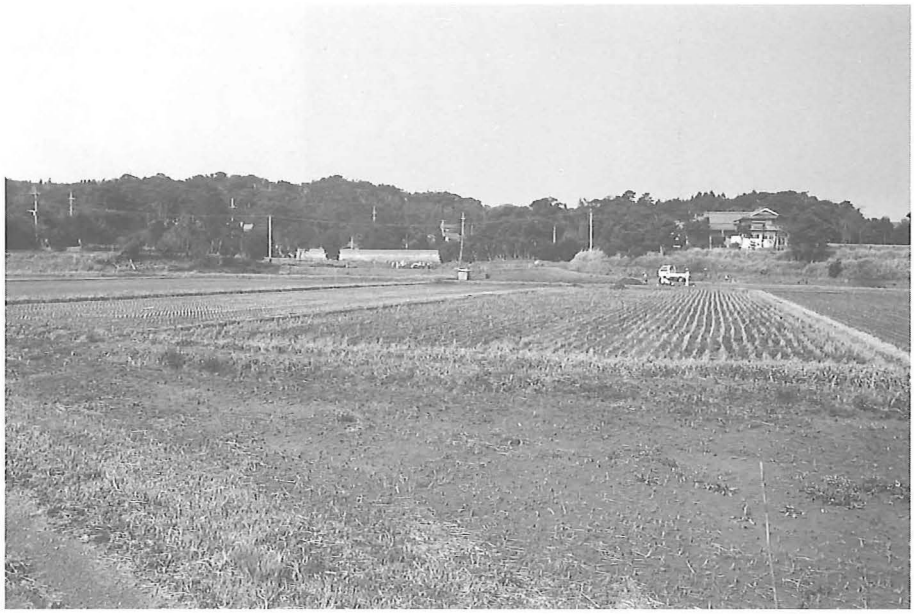
Ⅲ区では，律令時代の遺物がややまとまって出土している。杯身・蓋のほか，壺や蔵骨器など器種に富むが，直接官衙に結びつくような資料は出土していない。遺物の量はこの後減少し，12世紀頃には量的なピークを迎える。ＳＤ２が機能していたのも，この時期と考えられる。ＳＤ２の機能としては，谷間であることから，何らかの排水の目的があったのではないかと考えられる。

Ⅳ区では遺構は確認されなかったが，谷状の地形が確認され北側の台地を削平した際の流れ込みの遺物が確認された。時期的な変遷をみると，遺物は古墳時代後期のものからあり，古代のものも含まれるが数は少ない。量的なピークは12世紀頃で，Ⅱ・Ⅲ区の出土状況と対応している。以後は遺物の量が減少するが，近世初頭までのものが含まれる。

Ⅴ区においては，落ち込み状の遺構が確認され，近世初頭を主体とする遺物が出土した。古代から中世にかけての遺物も出土するが，量は少ない。

以上の結果をふまえ，総括すると次のようなことがいえる。遺構・遺物の出土状況から興触遺跡は，①律令時代（８世紀頃），②平安末～鎌倉初頭（12世紀頃），③室町～近世初頭（15～17世紀初頭）の三時期に大別されると考えられる。①の段階では，Ⅲ区の周辺に主体があると思われるが，直接官衙に結びつくような遺物は確認されておらず，以前からいわれているような国府との関連は，現状では不明である。②の段階では，溝状遺構・土壙・建物などの遺構が確認され，土師杯・Ⅲと白磁を主体とする貿易陶磁器が多く出土する傾向がある。貿易陶磁器には朝鮮系の無釉陶器や初期高麗青磁が若干含まれるのが特徴である。また，石鍋や瓦質鍋などがまとまって出土することから，生活空間が考えられ，居館・屋敷などの存在が想定される。③の段階では，遺物は少ないがベトナム産のものや粉青沙器，周防系すり鉢などの出土が目立つ，東側の覩城の影響下にあったのではなかろうか。

図　　版



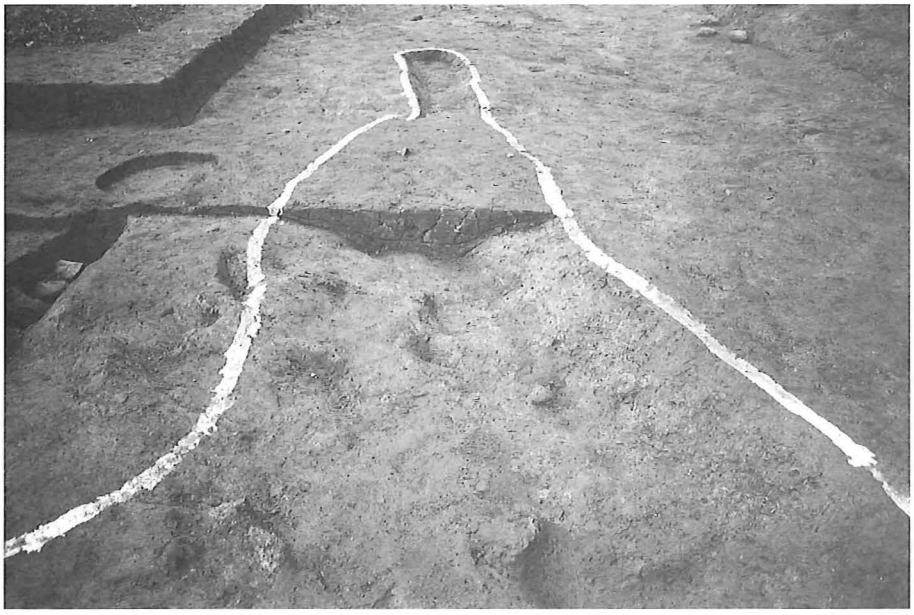
遺跡遠景

II区調査風景

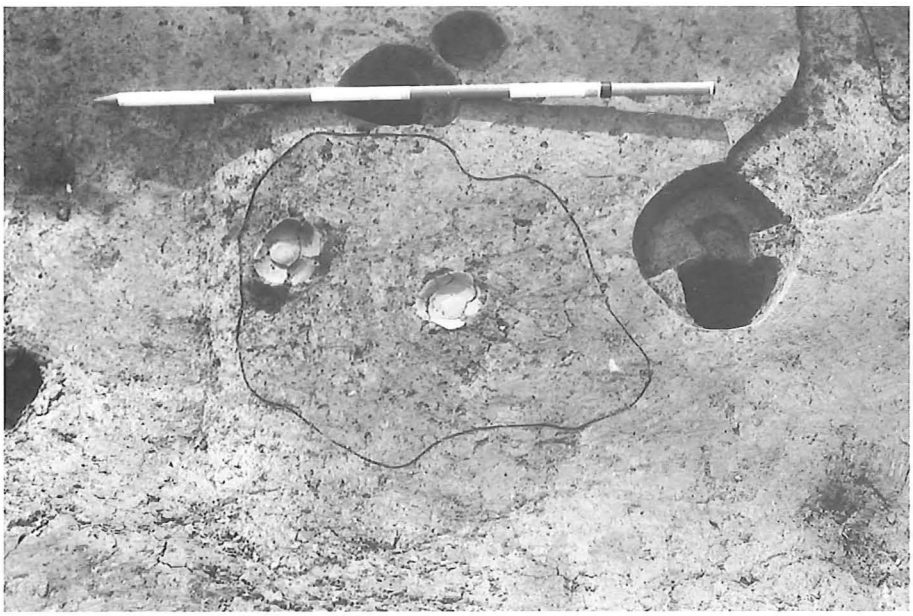
II区包含層検出状況

II区遺構検出状況

II区ＳＤ１（南端）

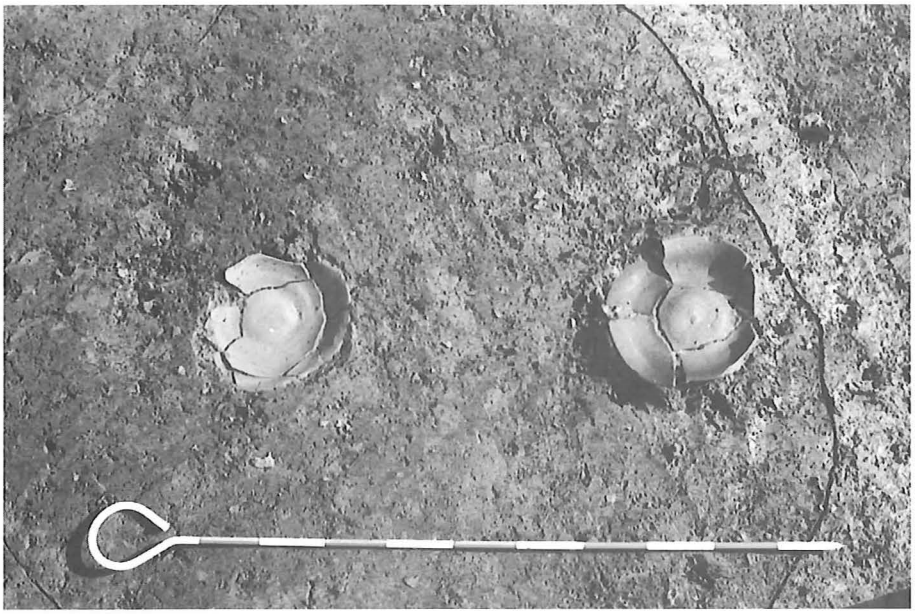


II区ＳＤ１（北端）

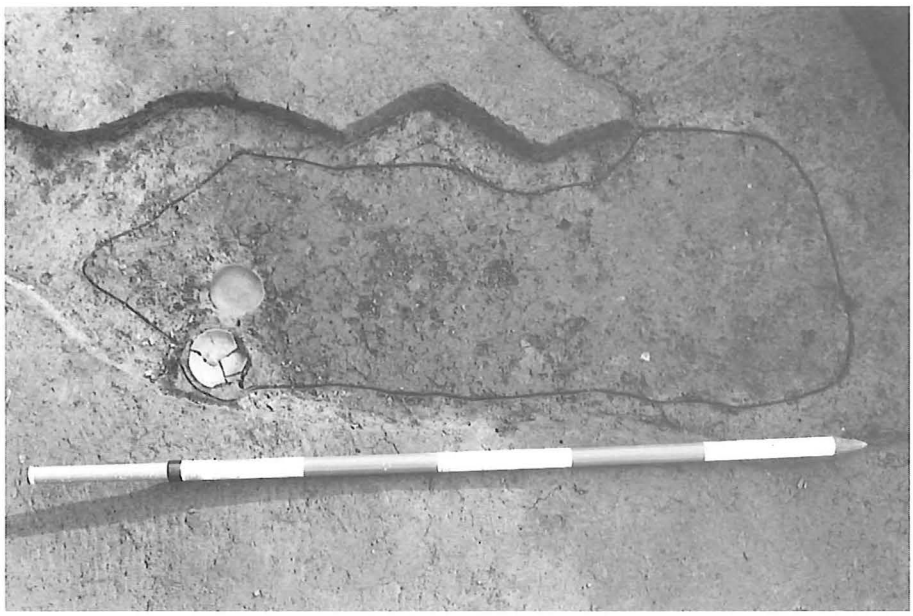


II区
ＳＫ１検出状況

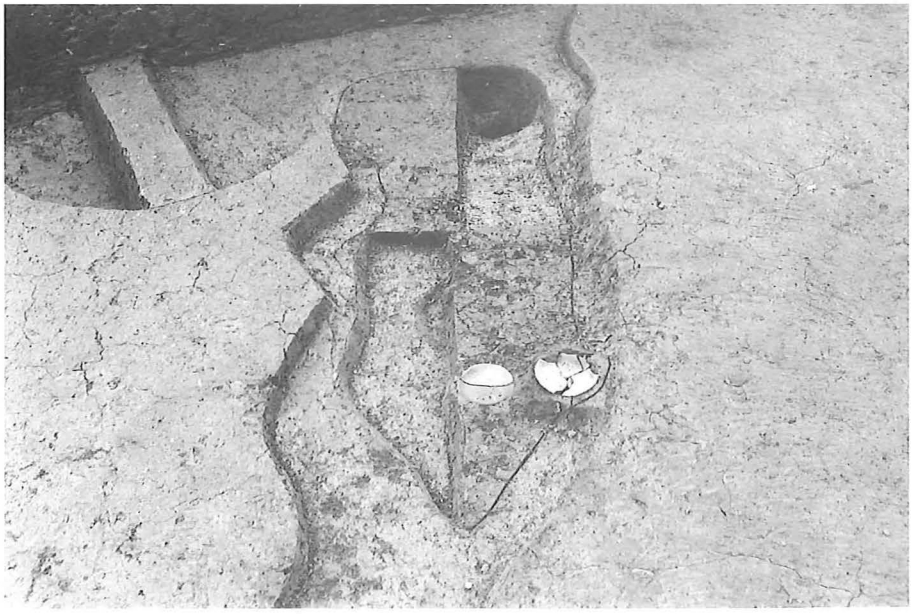
II区
ＳＫ１検出状況



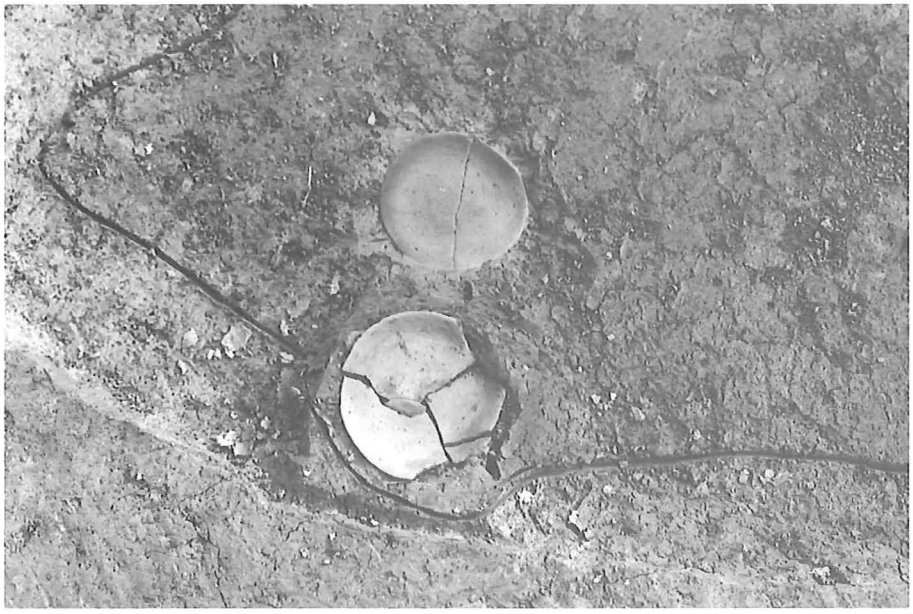
II区
ＳＫ１遺物出土状況



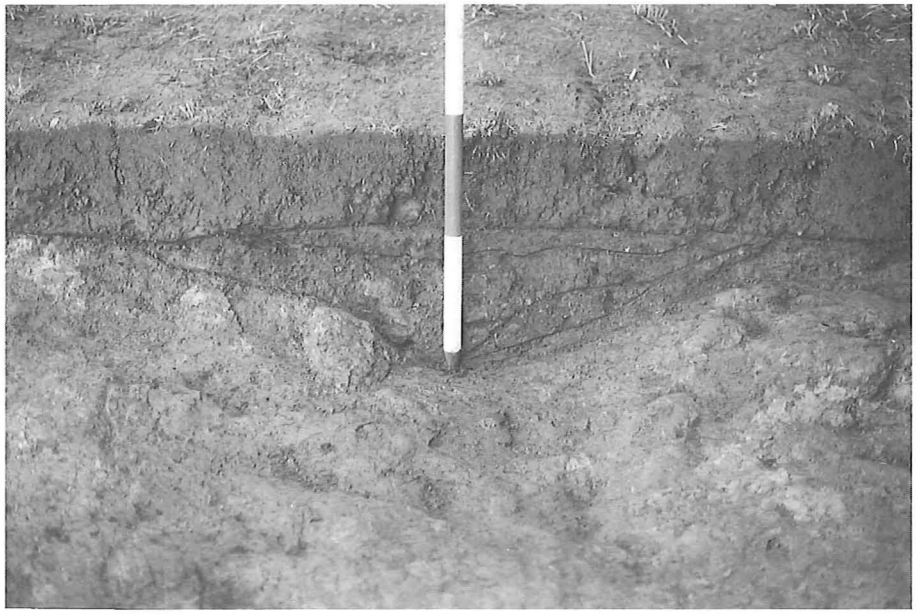
II区
ＳＫ２検出状況



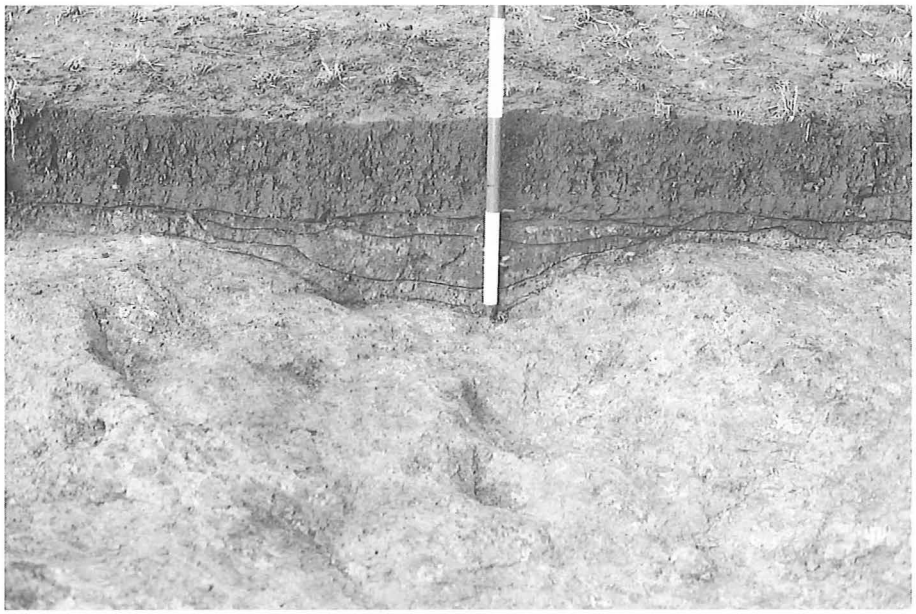
II区
ＳＫ２検出状況



II区
ＳＫ２遺物出土状況



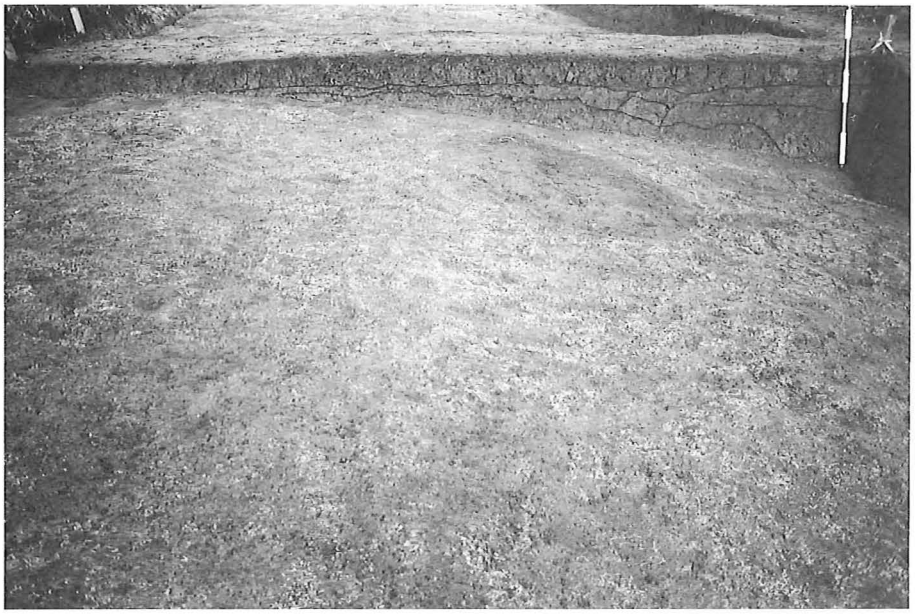
II区
ＳＤ１北側土層（Ｄ区）



II区
ＳＤ１北側土層（Ｃ区）

II区
Ｄ区西側落ち込み

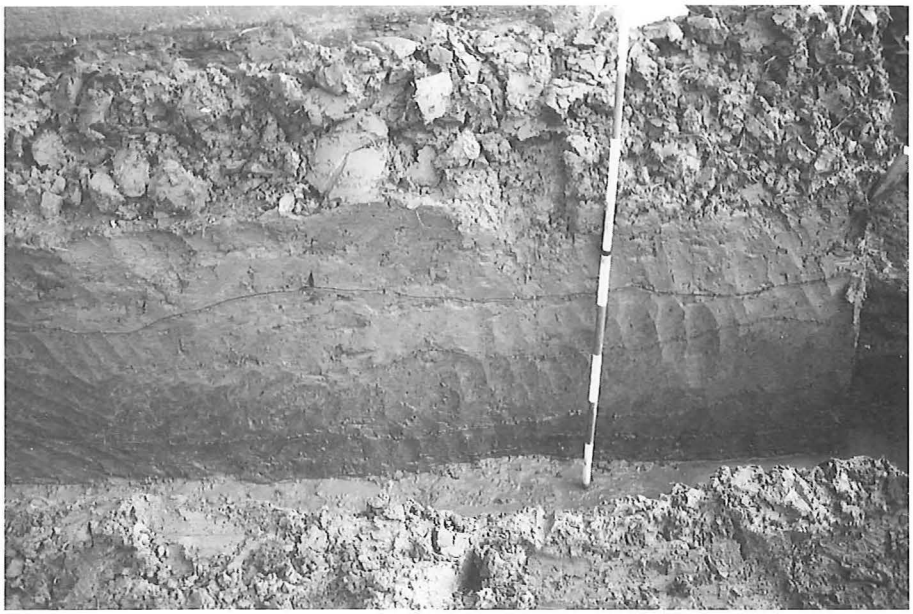
II区
E区北側土層



I区
G区北側土層

III区
調査風景

Ⅲ区
Ｒ区東側土層



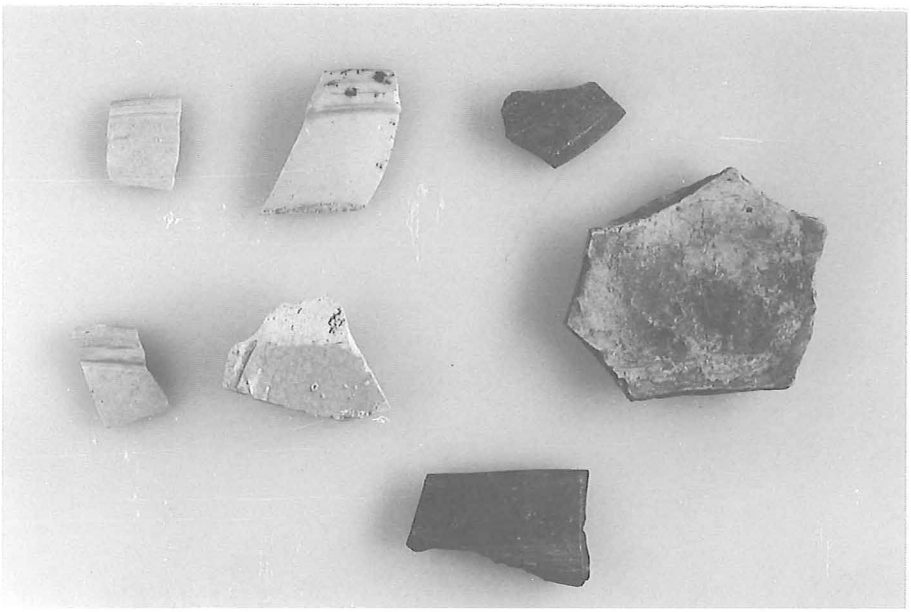
Ⅲ区
Ｊ区南側土層

Ⅲ区
ＳＥ１

Ⅲ区
ＳＤ２検出状況

Ⅲ区
ＳＤ２完掘状況

Ⅲ区
埋納白磁・土師皿



平成 4 年度
範囲確認調査出土遺物

II区
ＳＫ 2 出土遺物

II区
ＳＫ 2 出土遺物

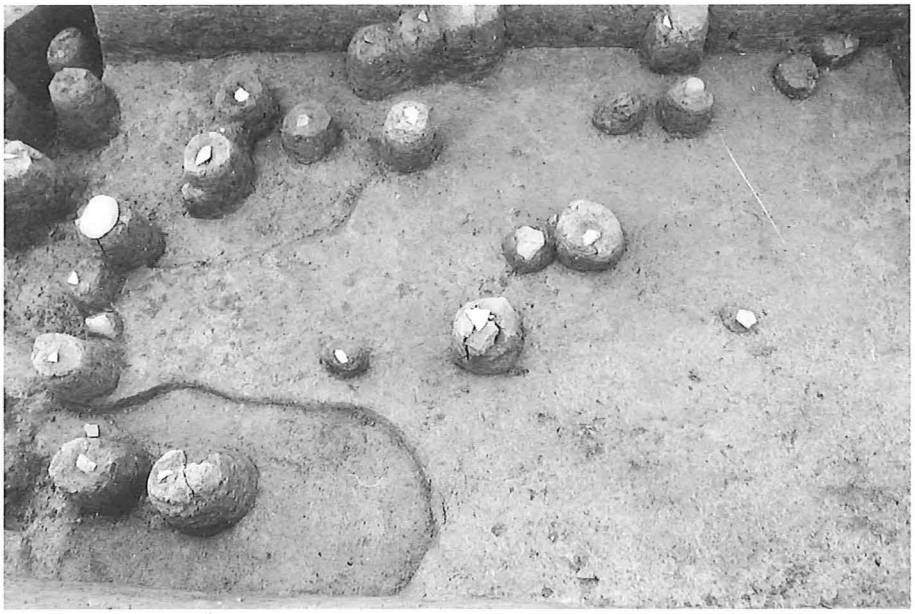
Ⅲ区
ＳＤ２出土遺物

Ⅲ区
ＳＤ２出土遺物

Ⅲ区
ＳＤ２埋納遺物

Ⅳ区
d区北壁土層

Ⅳ区
e区北壁土層



Ⅳ区
i区遺物出土状況

平成７年度
範囲確認調査

ＴＰ７Ｎ
柱穴検出状況

ＳＫ21
青磁碗出土状況

15・18・19・17
出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こうふれいせき
書名	興触遺跡
副書名	幡鉾川流域総合整備計画に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告
巻次	VI
シリーズ名	原の辻遺跡調査事務所調査報告書
シリーズ番号	第7集
編著者名	川口洋平・松永泰彦
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	長崎県壱岐郡芦辺町深江鶴亀触1092-1
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
こうふれいせき 興触遺跡	ながさきけんいきぐんあしべちょうゆたけこうふれ 長崎県壱岐郡芦辺町湯岳興触	42423	75	33度 45分 45秒	129度 45分 35秒	19921116～19921121 19950728～19950920 19960220～19960308 19971112～19980306 19980220～19980327	32m² 180m² 867.8m² 311.0m²	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
興触遺跡	集落	古代～中世	溝状遺構 土壙	土師器 貿易陶磁器	

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第７集

興触（こうふれ）遺跡

1998．３．31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂印刷